

“可”について

戸川芳郎

## 論文『“可”について』の要旨

○時期：本論文を作成した時期（1954年）は、中國においては文字改革委員會の精力的な活動（例へば漢字の簡略化問題・拼音化草案の作製など）が本格化しだした年である。同時に漢語規範化問題がひきつづき言語學界で討議されてきた最中であり、焦點は共通語の確立と普及に向けられた（因みにその翌年、全國文字改革會議では、共通語とは「北方語を基礎方言とし、北京音を標準音とする普通語——漢民族の共通語」であるといふ點で意見の一致をみ、「重點的隱步前進」方針を決定した）。

一方、わが國では、1946年創設の中國語學研究會において、敗戦前對立のままであつた中國語學の「小學」と實用語學（あるいは「支那語」）とが急速に精算されはじめ、中國の抜本的改革の動向に大きく刺戟されつつ、言語科學の一分野に統一的に突入して行つた時期でもあつた。

ことに學習者であつたわれわれ學生にとって、混亂と低迷の中國語學における基本面の整理——漢語規範化の初歩段階——は當面の急務であつたと考へる。

中國では、解放後「正確地使用祖國的語言、爲語言的純潔和健康而鬪爭！」《人民日報》社論、1951.6.6.の呼びかけと同時に『語法修辭講話』が出現し、『語文學習』・『中國語文』兩誌の發刊を見、わが國中國語學を大きくゆさぶつた直後であつた。

○對象：從來の文法研究が往往瑣末主義に奔り、規範化についての工作がおろそかであつたことが中國で自己批判されはじめると同時に、わが國の中國語學者間にも日本の中國語學・

(4)

中國語教育の上で厳しい反省が現はれた。

私は、さう言ふなかで中國語の虚辭が、日本語の助動詞・助詞のやうに、その言語の持つ文法の基本構造の本質を具備してゐると言ふ考へを持ち、さらに言語の規範化に伴なふ非論理的な面の排除によつて、虚辭が好ましくない類別化をうけてその本質的機能が解明されなくなる傾向を恐れ（それは杞憂であつたことがのちに判かつた）、思ひ切つて“最も話手の氣分に支配されて作用する”指詞“可”一字について、自分の考へた結果を述べてみようとして試みた。それが本論文作製の動機である。

“最も話し手の氣分に支配されて作用する”“可”を選び出す資料として、その言語の話して (informer) の<sup>なま</sup>生のことばを欲したが、望めず、定評のあつた老舍原作『龍鬚溝』焦菊隱《排演本》その他からカード化した文字 (character) に據つた。  
○方法：從來の分類を目的とする品詞論は意識的に避け、文法上その機能と結合の關係から三大別に分類し、順次構造論的な、統一的に一貫した解釋を行ふよう努力した。

ただ通時論的方法をとらずに、文言を引用して混亂を招く原因となつてゐるのは、我ながら醜いかぎりではあるが、この文言の引用は本文にもことわつたやうに現代語の構造をより明確にしうる何らかの示唆を得るための援用であつた。

しかし、未熟な考への下でとりあつかつたこと（私は正式の指導教官は得られなかつた。教養學部助教授工藤篁先生の助言に多く影響を與へられたやうだ）のため、審査教官（倉石武四郎教授・藤堂明保助教授（當時、講師））による傍白の注意書のやうに多くの缺陷が指摘されてゐる（——必ずしも承服するものばかりではないが）。

とくに通時論的方法は、資料の検討から文獻學的に問題にしなければならず、この論文では文言關係の面は除外して、現代北京語から一連の同類の語“倒”“却”などと對比することも一方法であつたらうし、方言調査に立ち入つて純共時論的方法で統一した論旨をより詳細明確にしなければならなかつた、とも考へる。

分類は、

- 1) 常に「表語」、述語、文——に先行して位置するもの。
- 2) 接尾辭“以”を伴なつて助動詞(「情意詞」となるもの。
- 3) 習慣的用法として現はれるもの(接辭化したものを含む)。

この中で解明の目標は、1)であつたが、構造論の上で統一して解釋を試みたことはいふまでもない。

“可”と“所”との對比を、この言語の機能の合意(肯定) ← → 決意の系列で行ひ、(これには審査教官の承認はえられなかつた)、“可”と“能”“肯”“願”との對比は、機能の合意(許可) ← → 「心願」の系列で行ひ、二面から“可”の機能的本質に迫つた。

さらに指詞の考へを導入して、以下の結論を得た。

○結論：

“可”の本質が指詞としての機能：指示——限定——提示にあると考へられる。一般的作用として、“可”は、「話し手の主體的な意圖に關係的に」、恣意性を伴なつて、環境(situation)・「上下文」、關係文において、陳述を限定する。——話し手の氣分の上からは、意志的な肯定的斷定(=合意)とより小さい願望(=許可)を「表はす」。

これを陳述(實詞)との結合關係においてみるならば、“可”を伴なつて「表語」を構成し、以下の陳述を、他を排除しつ

(6)

つ提示する機能をもつ。

“なまのことば”に近い『龍鬚溝』に、それら以上の「可」(分類1)を中心とする)の多いことは、指詞としての機能をよく表はしてゐる。指詞は、“いきたなまのことば”の中にこそ、その固定化しない無定着な性格のまま、永く生きてきたのである。話し手の姿勢を最も強く、常に微妙に反映してゐる理由もここにある。逆に言ふならば、1)の指詞“可”の多寡によつて、現在中國語作品から、その使用言語の「生龍活虎」の程度を伺ひ知る一證となる。(cf. 興臺村劇團集體創作、樂鳳桐・李心斌・李永之・金劍改編；『人往高處走』(獨幕劇)、作家出版社、1954.4)

以上 (1958. 2. 11)

## §1 はしがき

現在、中國において、廣汎な文法學者、國語學者、言語學者は、「われわれが學習して、ことばを正しくつかへるようになることは、われわれの思想の正確さと、活動の効果を高めるうへで、きはめて重要な意義をもつてゐる」と言ふ點から出發して、この『正確地使用祖國的語言、爲語言的純潔和健康而鬪爭！<sup>(1)</sup>』に應じ、眞劍に討論・研究を重ねてゐる。このことは、中國の文法研究に限らず、中國語學研究全般の進むべき道が、現在使用されてゐる“いきたことば”を基礎にして、それを原則的な面に互つて——發音・語彙・語法の線に沿つて、加工し規範化することに重要課題を擔つてゐるといふことである。文法研究の從來のやり方について、「忽略了語法書的指導性、過分強調語言事實的客觀分析 (這是必要的、但是只憑客觀分析是不够的)、而輕視規範化的工作。<sup>(2)</sup>」と自己批判されてきたのも上の點からなされたものに他ならない。

我我もまた中國語を正しく學習することによつて、「正しい言葉は思想の正確さを高める」と言ふ問題を深め、我我自身のことばについて考へる契機としなければならない。そのため、中國語學習の場から離れることなく、それを通じて提出される語學的な問題を中心にして、ここでその問題點ととつ組まうと考へる。

特に、虚詞を選び、またその内でも最も話手の氣分に支配される作用を持つ指詞“可”を選んだのは、“老百姓”のことばに直接觸れることによつて、中國語のもつ文法の基本構造の本質に迫る一つの掛け橋となれば、とばかり考へたためである。

## §2 『龍鬚溝(排演本)<sup>(3)</sup>』と“可”

2.1 「我們翻開『龍鬚溝』一看、「可」字真是用得太多頻繁了。雖不能說每一句都用「可」字、但劇本的每一頁上都有好多用「可」字的句子。隨便摘幾句在下面：

/ 哟! 二春, 可又得挑水啦! / (L. 4=13)<sup>(4)</sup>

/ 這麼多年啦, 可真虧得你一個人兒掙歪啦! / (L. 5=14)

/ 這條溝可有毛病, 常淹死孩子... .. / (L. 6=12)

/ 咳, 小孩子可哪兒有不貪玩兒、的呀. / (L. 9=14)

/ [媽, 您也難怪姐姐, ]<sup>(5)</sup> 這兒可够多髒啊! / (L. 17=1)

/ 這兒髒? 可有活兒幹呢! ... .. / (L. 17=2)

/ 媽哟, 可 [了不得啦, ] 又要下雨啦, [快收拾東西! ] / (L. 45=14)

乍一看、覺得北京話把「可」字用得太多濫、似乎句句話都可以用它; 它好像已經給磨得失掉了性格、已經「裝飾化」了。但是仔細琢磨一下、這樣想是不對的。口語裏不大用裝飾的東西、要是沒用、語言就會拋棄它。」(何阡陌; 「可」字的說服性)<sup>(6)</sup> と。この種の“可”については確かに「用得太多濫」であつて、他の文藝作品には見られないほどである。

(8)

L. には字 character としての“可”は、317 個算へられる。その中、とがきの部分を除いて 83.5% 258 個<sup>(7)</sup>が大まかに言つて、述語又はそれに相當する文——話手が何らかの意味で主題を設定して、それについて陳述されたもの——に先行して位置する“可”<sup>(8)</sup>で占められてゐる。L. は「很豐富的、生動活潑的、表現實際生活的」の生きた語彙で埋まり、「滿篇句句生龍活虎的北京土調」(L. の佐藤博氏のあとがき)で、語學上北京方言を調査する上の貴重な資料を提供してゐる。老舎の原作に較べて、“老百姓”の土調に接近度の高いことは、排演本の性格でもあらうが、標準語の帯びる規範性から自由な、従來の文藝作品にみられる北京語の域を出た、新しい意義を持つ劇本と言へる。そのために起こるいまだ規範化を經ていない「生龍活虎」なことばの持つ表現の激しさ、感情の豊かさは、この作品の讀者または觀客との關係を直接に示してゐる。

ここで、これを北京方言の資料として、虚詞の何れかについて検討することは、我々中國語學習者にとつて、まづ“いきたことば”をより深く體得する上に有益であると考へ、一字ではあるが“可”について見ることにした。最初、上に挙げた用例中に見られるたぐひの“可”は、話手の氣分を反映して投げかけられる挿入詞<sup>(9)</sup>に相當すると推測し、以下の検討にも絶えずそれを念頭において行はれる。統計上から、これらの“可”が“なまのことば”に近いほど多いと言はことになるが、同時にこのことは“可”の性格を決定する主要な環であると思へる。

2.2 虚詞の検討は、文の中でどの位置に立ち、どの單語と結合するか、と言ふ關係においてとらへることは當然であるから、“可”についてもこの點から先づ分類觀察を試みる。特に陳述中の實詞との關係をみるために、接續の度合に注意した。

なほ、用例採集の範圍は、現代北京語で書かれた老舎の7作品の各各の全部或いは一部分に互つて“可”字を採取し、L. のそれと對比させた。參考までに東北方言の1作品を加へた。<sup>(10)</sup>(整理された「分類表」は、別紙の通り。)

上の分類から、“可”は三大別される。

- 1》常に「表語」<sup>(11)</sup>、述語、文に先行して位置するもの。
- 2》接尾辭“以”を伴なつて助動詞（情意詞）となるもの。
- 3》習慣的用法として現はれるもの。（接辭化したものを含む。）<sup>(12)</sup>

いま、これらを意味と機能の上から、共通する、又相異なる點を檢討するために、便宜上2》から述べて行きたいと思ふ。便宜上と言ふのは、“可”を實詞或いは他の單語と相關的に解釋しようとする上でのことで、史的關係を考慮したことではない。

### §3 “可以”について

3.1 古文では、可能性（possibility）を表はす能願末品（optative tertiaries）<sup>(13)</sup>（王力；中國語法理論）としての“可”と“可以”とは意味を異にしてゐた。“可以”は現代語の“可以拿來”に當る。“以”は、“拿來”、“用”<sup>(14)</sup>の意味を持つ動詞的性質の強い指詞であり、主題又はそれに相當する上の陳述を受けて、次の陳述がなされることを豫想させる。

/習習谷風 以陰以雨/<sup>(15)</sup>（毛詩・邶風・谷風）

/一言而可以興邦。有諸？/（論語・子路）

“以”は「谷風」「一言」を具體的に指示してゐるが、ここでは飽くまで話手の積極的な氣分を反映して、「谷風」「一言」と言ふ主題に對して以下の陳述を提示してゐるに止まつてゐる。「谷風」と「陰」「雨」「一言」と「興邦」との間には、いはゆる論理的な一定の關係まで“以”の構造から要求されてゐない。しかし、これを一步進めて主題と“以”によつて提示された陳述との間に何らかの因果關係を意識するに至るのは容易である。逆に、設定された主題（又は文）とそれに對する話手の陳述との關係が論理的に原因・結果の形に整理される——これはむしろ話手の思惟が一層論理化される過程を示してゐる——に及んで、“以”が原因又は條件を受けて、歸結の陳述を導く關係詞に定着して行



(10)

くと考へられる。“因爲… …、所以… …”の“以”として記號化し、“所”と結合して因果關係を示す關係詞として固定したのは上のことを示すのだらう。

ここで“可以”と“所以”との關係詞的用法としての對比を考へなければならぬが、説明はのちに譲る。<sup>(17)</sup>

3.2 「司馬夜引袁盎起、曰：「君可以去矣。」」（史記・袁盎列傳）に早くも現はれる“可以”が、來源的には一語でなかつたのであるから、一步もとに戻つて、“可”の構造をさぐる必要がある。

ここでしばらく文言の用例を引用することを續けるが、これは、現代語の構造をより明らかにする示唆を得るための援用であつて、中國語發達史を目指すものではない。

阮元の『經籍纂詁』<sup>(18)</sup>に、「可者、遂其意之謂也」「（荀子・富國）（生也）皆有可也、知愚同。所可異也、知愚分。」楊倞注を擧げてゐる。“可”はある事に向かつて主觀的（恣意的）な意志（＝「意」）をもつて志向することである。それを過程としてとらへ、動詞的に用ひられてゐる。また、

「我則異於是、無可無不可。」<sup>(19)</sup>（論語・微子）

は、“主觀的な意志を持ちながら、策謀的な豫期された行動をしない”意味であつて、“可”が主體の側からする意志的な斷定を伴つてゐる。話手の意志的な志向は、環境 situation に話手の肯定的な斷定——許可——の氣方を反映させる。

劉淇の『助字辨略』<sup>(20)</sup>は、「許可」の“可”を意味から「深許之辭」と「僅可之辭」とに分けてゐる。（孟子・離婁上 19）「事親若曾子者可也。」は、“這眞是對！”の意味で、前者である。『説文』<sup>(21)</sup>の「可：肯也」、『助字辨略』の「否之反也」の説明にも適合する。話手にとって「合意」の氣分を表はしてゐる。

意志的な肯定的な斷定——許可——は、主體的な禁止の話を伴つて意志的な否定を行ふ。

/與駢之人，欲盡殺賈氏，以報焉。與駢曰：「不可。」 /（左傳・文公六年）

/大夫辭之，不可，曰「是昭余讎也」。<sup>(22)</sup> /（國語・晉語九）

/顔淵死。門人欲厚葬之。子曰：「不可。」/ (論語・先進)

“不可”は“不是”であり、もつと話手の積極面が出て、“不對”、“不行”、“不要”である。話手自身の氣持に「合意」<sup>(23)</sup> しないことである。

これに對して、

/子曰：「苟有用我者，期月而已可也。三年有成。」/ (論語・子路)

は、「僅可之辭」で、「可者未足之辭」(皇侃義疏)としてゐる(『經籍纂詁』引)。「深許」と同様、「合意」の氣持は一貫してゐるが、“一年間じやまあまあといふところだ”で、肯定——許可する主體的意志が弱まつてゐる。更に、

/子曰：「雍也，可使南面。」仲弓問子桑伯子。子曰：「可也，簡。」/ (論語・雍也)

は(皇侃義疏)：「可猶可謂也。」と言つてをり(『經籍纂詁』引)、“可以”として、“一應そんなことも言はれよう。アツサリした奴だから”の意味になる。

以上、「深許」「僅可」と“可”を分けて考へたが、“許可”の程度はむしろ環境 situation、上下文 context に基くもので、“可”の音韻上の差があるか否かは考慮に入れない) 文の構造上區別されない。中國語の虚詞一般について考へられることであるが、陳述の意味の上に、それが環境・上下文と常に關係的な話手の氣分を伴つて現はれてくることで、許可の程度も話手の積極的な意志を裏づけてこそ統一して検討することができる。

このために、“許可”の程度で二分することは止めて、“可”が「否之反」、  
「肯」であり、設定(又は想定)された主題(又は文)に向つて、話手にとつて  
“合意”である、といふ積極的な肯定的斷定——許可——を意味するとした  
い。しかし、その“合意”の程度とその仕方が、「肯」「當」「許」などではな  
く“可”であることに飽くまでも問題が残る。多くの釋詞書に“可”を「肯」、  
「許」；「當」、「稱」、「合」、「堪」<sup>(24)</sup>となされてゐるのは、その部分分擔的な説  
明を加へたものである。

### 3.3 上の問題を深めるために、先づ“合意”の程度を見よう。

現代語でこの“合意”を示す助動詞はすべて“可以”で表はされるが、文章

(12)

體には習慣的用法の“可”として多く残つてゐる。

「依違兩可」<sup>(25-1)</sup>の“兩可”は、“依也可以，違也可以”で、又“可... ..可... .. (可以... ..可以... ..)”<sup>(25-2)</sup>の構文を作り、兩者對比さして“どちらでもよい——一應どちらも認められる”といふ意味で、その程度の“合意”である。

/他是來享受，她不能，不肯，也不願，看別人的苦處。 / (S. 192=2)

の“不能”、“不肯”、“不願”が後になるほど、環境との關係を無視して、専ら話手の意志が強く出てゐる。同じ“いやだ”と言ふ事を、常に話手の意識に關係的に、陳述の上に反映させることは、上述の虚辭の特徴であるが、この一群の「心願」<sup>(26)</sup>の性質（“合意”——“願望”の程度）から見た系列の中で“可”はどこに入るだろうか。もし“不可”を加へるならば、“不能”の前になるであらう。

博良勳：『補助動詞的研究』<sup>(27)</sup>に従つてゆけば、“可”は“能”よりも話手の意志が弱く、逆に、「就看環境的許不許說」と言ふことになる。“我能去”は自分に行く能力のあることで、環境の條件に「力可勝任」してゐるが、“我可以去”は「環境上或事理上的許可」を得て、“能去”するのである。そのため次の様な用例は、“可以”を用ひた時と微妙な氣分の違ひを示す。

/天亮了我們能出發了。 /

/領到許可證，就能買車票了。 /

/小趙來了，說天真可以出來。 / (X. 156=10)

/有希望，天真不日就可以出來。 / (X. 160=13)

/溝修好了，我可以接姑奶奶回娘家啦！ / (L. 129=13)

しかし、これについても“能”の願望の氣持の強いことには變りない。話手の利害關係が直接に示されてゐる。

“可以”、“能”ともに、話手の「心願」の程度がその差はあるが、上下文、環境に關係的に述べられるが、話手の主觀的な「心願」は“肯”、“願”になる程強くなる。“我肯來”は環境に相對的に「對事裁可」するが、その判斷を下すことは、環境の條件に即してといふよりも話手自身の面子などによつてゐる。

て、主観的な気分が一層前面におし出される。

/我不肯把光陰都耗在喝酒打牌中。/

/我這樣窮，他還肯屢次跟我借錢借東西。/

/剛離開這兒幾個月，就不肯再回來了，說一到這兒就要吐，真造罪呀!/(L. 18=4)

/只要肯吃苦，肯幹，人人都能有事兒做!/(L. 67=3)

“はぢをかまはず”、“堪へしので”の気分が出るのは、環境の条件より以上に主観的な意志を強くしてゐるためである。“我願意來。”、“不願!”は「自心發動」の気分が更に強まる。専ら話手の願望を絶対的に表はすため、文に will mood が大きく支配してくる。

以上のことから、環境を念頭において肯定的な断定を下すことには變りはないが、“可”は合意から願望に向ふ「心願」の系列中で陳述に反映される話手の積極的な気分については、より薄い程度しか示さないといふ事になる。

3.4 “可”が話手の意志的な合意・願望のより少い(單純な)可能性を示すことは、逆に上下文、環境に支配される度合を強める。主観的な気分の上では一歩退きながら、逆に陳述の客観性、論理性が増し、そのために説得性が強まる。

一方、上下文、環境に支配される程度が大きくなり(單純な)描寫的な可能性を示すと同時に、主題と“可以”に導かれる以下の陳述との間に一定の關係を保つ傾向が強まる。指詞“以”と結合して、“所以”と同様に、“可以”が因果關係の歸結文(條件文の主文)に先行して位置してきたことは、以上のことを説明してくれる。<sup>(28)</sup>

/大媽：溝修好了，我可以接姑奶奶回娘家啦!/(L. 129=13)

/趙老：到家裏看看，要是沒法兒歇，沒法兒睡的，還可以到店裏去。/(L.117=7)

/趙老：四嫂，叫他跟您去去吧，陪陪您，也可以叫他心裏痛快痛快!/(L.56=17)

“所以”の場合は、現代語では因果關係の歸結を示す關係詞として固定してしまつてゐるが、指詞として絶えず“可”と對比される“所”が關係詞の一接辭として記號化してゐるにも拘らず、“可”は同じ因果關係の歸結文に立つて

(14)

助動詞として、しかも条件と歸結の文の間に論理的な必然関係をみせず、常に話手の側からの主體的な肯定的斷定——許可の氣分を介在させてゐる。

このことは“所”と“可”との差異の本質を衝くものであつて興味深い。

“可”と“所”の相異は、陳述に對する話手のもつ恣意性、非恣意性の間にあると考へられるが、そのことは §.4.4. で述べることとする。

3.5 次に“合意”の仕方についてであるが、“可”が本質的には指詞の機能を失はないことから、指示、限定のはたらきを文の上で見て行きたいと思ふ。

指代詞は、普通言はれるのは「代替或區指名詞、動詞、形容詞、數量詞」(張志公『漢語語法常識』)といふことである。王力は指代詞を「凡詞能替代實詞者叫做代詞」<sup>(29)</sup>として代詞にまとめて説明した。しかし同時に「代詞則因其作用在於替代、以致本身不能有一定的意義」<sup>(30)</sup>と言ふことを認め、「語法成分」<sup>(31)</sup>に加へてゐる。機能が代替性にあるとしても、更にその機能の基くもの(「本身」?)はつかめないだらうか。

中國語の指代詞は多く語氣詞に來源する。これらの語氣詞(「若」、「乃」、「爾」等)<sup>(32)</sup>は本來は替代性よりも指示性に機能の特徴づけられてゐた。話手の具體的に指示する事が、客觀化して指示され、その結果替代される對象が中心に意識されて後、「代詞」が獨立した「領土」<sup>(33)</sup>を獲得したのであらう。藤堂明保氏は次の如く言つてをられる。「實詞に代替するから代詞というとの考へは、多分に分析的客觀的な見方で、活きた言行為に即していうと、明らかに指示の作用が本質である。もし代替性に重點があるなら、『何に代るか』という對象自體の性質が、指示詞の形を左右する筈であるが、前記の如く《註(32)參照》、若・乃・爾等は、話手に對立する人物にも、或る状態(時には程度、時間、場所、方式等)にも代替する。故にこれらはむしろ『ゆびさす身振り』の言語化したもので、従つて指示の作用を本質とすると考へるのが妥當である。」(藤堂：上古漢字に於ける指示詞の機能)<sup>(34)</sup>と。私はこの考へを採つて、指代詞が指示の機能の面に本質を持つと考へ、指詞と呼ぶことにし、上の語氣詞などをも含めた。

我我にとつて問題にしたいのは、文の中でその指示の仕方がどの様に行はれるか、又その結果どの様な意味を加へるかといふことである。<sup>(35)</sup>

「想起詞」<sup>(36)</sup> 的に用ひられる指詞として上場の論文には、

/時人斯其維皇之極。 / (尚書・洪範)

/時人斯其辜。 / (尚書・洪範)

/罪疑惟輕，功疑惟重。 / (尚書・大禹謨)

が挙げられてゐる。指詞の本來の機能としては、ただ話手の氣分を各各異つた角度から直接的に投げかけるといふ言はば間接的に陳述の間に挿入されることばである、と考へた。このことは環境において陳述を喚起し指示すると言ふ仕方になつて、さまざまのニュアンスを與へる。しかしここには文法的關係を示す機能はまだない。「その人は偉大な道に適つてゐる」といふことを、人一皇一極の間に話手の氣分を直接に挿入することによつて表はし、そのことから陳述の間に限定的作用を及ぼし、それを指示する作用も伴なつてくる。

この場合、指詞の指示—限定—提示の程度は、いはゆる「つよい」「よわい」、「おもい」「かるい」等となつてニュアンスの上に反映されるが、話手の氣分に左右される。特に指詞の機能が文法的性格に乏しい無定着な場合の文（古文に限らない）にあつては、話手の氣分と陳述とのなす角度（關係）を攬むこと自體、その文の解釋を行ふ重要な要素と考へられる。

／曰：「是魯孔丘與？」曰：「是也。」／（論語・微子）の“是”などが指示の機能と同時に、肯定的斷定（“不”はその逆）を下す應諾詞としての機能を持つことは、上のことを最も率直に示してくれる。應諾（“可”の場合は、上にみた様に許可）は話手の積極的直接的な氣分をそのまま出してゐるからである。

指詞が客觀的な對象又は陳述（文）の間の論理關係に基いて、逆に因果關係の關係詞として固定して行く例などはさまざま豫想され得る。上場の論文にも「詞間の連結詞」、「詞句關連結詞」、「別事詞」等としての指示詞が挙げられてゐる。一方、文を法 mood としてとらへるならば、その各各について指詞がど

(16)

の様な作用を及ぼしてきたかが考へられるが、これは今後整理されるべき大きな課題である。<sup>(37)</sup> 一例として、想定された (thought mood) 文中に指詞“所”<sup>(38)</sup> が用ひられることなどである。

ここで指詞として“所”を出したが、その指詞の機能が、具体的に限定的な作用を示す用例として：

/廣令諸騎曰：「前!」前未到匈奴陳二里所，止。 / (史記・李將軍列傳)

/十八日所而病愈。 / (史記・扁鵲列傳)

/其巫，老女子也。已年七十。從弟子女十人所。 / (史記・滑稽列傳)

/才留三千所兵守武昌耳。 / (吳志・周魴傳)

/自後賓客絕百所日。 / (世説・規箴)

/數問其家金餘尚有幾所? / (漢書・疏廣傳)

がある。數詞に後置されてこれを限定する。話手にとって“こればかり (=「許」) ”、“これっぽっち”、“ただこれだけ”と指示・限定する気分が出てゐる。

これと類似の作用を及ぼす“可”に：

/遇剛武侯，奪其軍，可四千餘人。 / (史記・高祖本紀)

/若朋友交游，久不相見，卒然相覩，歡然道故，私情相語，飲可五六斗，徑醉矣! / (史記・滑稽列傳)

/大宛在匈奴西南，在漢正西，去漢可萬里。 / (史記・大宛列傳)

/五殘星，... 其狀類辰，去地可六丈。大而黃。 / (漢書・天文志)

/去將軍可千二百里。 / (漢書・趙充國傳)

/章小女，年可十二。 / (漢書・王章傳) (宋祁曰：「可十二猶云約十二」)

がある。數詞に前置されて、その範囲を限定する。多くの文法書・釋詞書では“約”、“大約”と説明し、不確定な數量を示す接頭辭としてゐるが、この限定がさらに強まれば、“ばかり” → “これだけ”<sup>(40)</sup> といふ意味になる。“可”を“恰”と解釋するのがそれである。

/可正是清明時候! / (元曲・李逵負荊・劇一)

/可正是一盞能消萬種愁。 / (元曲・李逵負荊・劇一)

“可”について (17)

/可便似舞因三眠柳，端的是這春風恰破瓜。 / (元曲・金錢記・劇一)<sup>(41)</sup>

又“可可”<sup>(41)</sup>が“丁度これだけ”、“これつぼつち”、“こいつこそ”の意味になるのも、“所”と共に本来の指詞から説明されるのが妥当である。この指詞の限定的な作用は、“可”の現代語の用法の中にも決して失はれることなく現はれてくる。<sup>(42)</sup>《§5. 参照。》

この様に見てくると、“合意”の仕方は、“是”等の應諾詞的な作用をもつ指詞と同様、指詞の機能に基いてゐるといふことが判かる。

/子貢曰：「貧而無諂，富而無驕，何如？」子曰：「可也」<sup>(43)</sup>。 / (論語・學而)

/季文子三思而後行。子聞之曰：「再\*斯可乎。」 / (論語・公冶長) (\* 皇疏本に「再」の後に「思」がある。)

は、應諾詞的な用法であつて指詞の機能がそのまま出てゐるが、話手の肯定的な断定の意味を伴つてゐることについては上に述べた通りである。現代語では、“可以”で表はされる。例へば：

/隨張大哥的便：他的話是怎麼說都可以。 / (X. 161=16)

/我只能拿二百。二百之外，再叫我下一跪也可以! / (X. 162=7)

(又單獨で/可以! /とも言へる。)

3.6 “可”の“合意”の程度と仕方について一通り見てきたが、元來それは、一體になつて文に現れるにも拘らず、その程度(許可—可能)の點がより明確に意識されるのは助動詞の“可以”であり、仕方(限定—提示)の點が問題となるのは三大別中の1)の“可”である。<sup>(44)</sup>

“可以”が助動詞としてその機能を最も明瞭にするのは、やはり述語(動詞)との關係においてである。ここで、三大別中の2)《習慣的用法としての“可”》に移らう。



(18)

## §4 動詞と“可”

4.1 かつて独立性の高い語であつたものが、いはゆる實詞と一定の結合關係を持つ様になり、また接辭化して、その機能を固定させ、また記號化させて行く過程は、言語發達史上稀なことではない。<sup>(45)</sup>

“可”が元來指詞の機能を持ち、話手の氣分に委ねられて、文中の話手の意志を反映した肯定的斷定を行ふ語であることは既に説明した。指詞が話手の氣分に委ねられ環境に左右されて、陳述上で一定の機能と意味の安定を缺くことは、言語の無定着性から定着性へと發展する過程の中では、次第に許されなくなつてくる。語彙は思惟の概念化の過程を反映して、排他的な同一性を保つことが要求せられる。

指詞“可”についてもまた、無定着な性質を次第に退けて、より客觀的な動作狀態に關係して固有の機能を持つて定着して行く過程を見ることが出来る。

4.2 指詞“可”の機能が動詞に接辭することによつて話手の氣分を反映した斷定的描寫(=「主體的描寫」)<sup>(47)</sup>の文を構成すると言ふことを先づ言つておかなければならない。

<sup>(48)</sup> /... .. 曰：「善。可教射矣。」 / (史記・周本紀，蘇厲語)《1》

/謂子路... .. 曰：「子可還矣。」 (史記・仲尼弟子列傳)《2》

/公叔座曰：「汝可疾去矣。」 / (史記・商君列傳)《3》

で、動詞に接頭して、そのもつ機能——動作、思想、行爲、發展變化を示す——に一定の規制を加える。“可以”が關係詞的用法<sup>(49)</sup>を持つて助動詞としての獨立性を強くし、應諾詞的用法の“可” (“不可”)<sup>(50)</sup>も二音節の單語として含め、動詞とのより弱い結合關係を保つてきた<sup>(51)</sup>のに反し、この“可”は現代語では習慣的用法として、動詞と強い結合關係を保ち又その接頭辭と化するまでに至つてゐるものもある。

“可知”、“可忍”、“可妻”、“可及”、“可逝”、“可欺”、“可求”... .. と『論語』に出てくるこれらの“可”は、意味の上から現代語の“可以”で解釋できる。

また／皆言匈奴；「可擊」／（史記・劉敬列傳）、／虞夏之文可知也。／（史記・伯夷列傳）と同じ構造を持つて、現代語に残っている“可往”、“可行”は、“可以去”、“可以辨”と言ひなほしうる。しかし同じ現代北京語の“可歌”、“可泣”は成語化してゐて“可以唱”、“可以哭”と改めては使用しない、“可見”、“可說”は、より習慣語と化した成語で、殆ど一語として使用される。

さらに現代北京語に一般に使用されるものに、輕聲化した“可”<sup>(52)</sup>を伴つた“可愛”、“可憐”、“可怕”... ..がある。

ここで、これらの結合関係をもつた陳述が文中でどの様なはたらきをするかを考へてみよう。

4.3 以上の関係の中で一貫して言へることは“可”の描寫性と言ふことである。§3.を通じて“可”の“合意”といふ性質——話手の意識に關係的な可能性——：許可—可能について見てきたが、このことは、文の mood からみれば、想定された (thought mood)、或いは祈使せられる (will mood) 事態を現はし<sup>(53)</sup>、その中での述語（動詞）が一つの不定な過程・状態としてとらへられ、いはば不定詞の性質を持つことになることは容易に考へられる。描寫性といふのは、“可”が想定された又祈使された氣分を文に與えるといふことでもあるが、ここでは動詞との結合について見なければならぬ。<sup>(54)</sup> 動詞との關係において見られるのは、現代語では、習慣的用法として現はれる。“可”（接辭化したものを含む）である。

ここで先づ説明の便宜上、動詞に接頭する“可”と動詞との結合關係を内的構造の面から分析した工藤篁氏の論を掲げる。<sup>(55)</sup>

<sup>(56)</sup>「“可”に先行されるものに“可憐”、“可愛”、“可惜”、“可笑”、“可恨”、“可惡”、“可憎”、“可怪”、“可疑”、“可觀”、“可氣”などがある。これらの動詞は、いずれも“可”に先行されないときは、ある客體を目指して進行し、その對象に何らかの影響を與える動作とか働きとかを表わす。これに“可”が先行されると、その動詞に、動作・働きを惹起する原因が對象<sup>(57)</sup> そのものの中にあるということ——つまり對象の性質を限定して述べる描寫的機能を與え

(20)

る。“可”に先行される動詞は意味的には能動動詞<sup>(58)</sup>に限られる」と。描寫的機能を與へる結果、形容詞句を構成する。<sup>(59)(61)</sup>また張志公のいはゆる描寫文の「表語」となり得る。<sup>(60)</sup>この中のある種のもは殆ど一形容詞として機能する程、強い結合關係を保つてゐて、“可”はその接頭辭と考へられるものもあるが、習慣的用法の域を出るに随つてその結合の度合も弱くなる。“可以”は“可”に變へて同じ構文を作り、より廣汎な動詞に接頭する。この場合はすでに助動詞“可以”である。例へば：

/他覺得他是可以同情的。 / (丁玲：——)

また同じ習慣的用法でありながら、“不”と結合して、より廣汎な動詞に先行する“可”は助動詞“可以”の意味と機能さへ保つてゐる。

/人民軍是不可戰勝的。 / (『語文學習』, 2期・3期, 1951-11・-12, 文裕論文) 《工藤篁：『將無同と不可戰勝』參照。》

/美帝國主義真可恨。 //這種東西可吃。 /

についても、“可以同情”、“不可戰勝”と同様、“可”本來の意味から、“恨”、“吃”と言ふ動作を遂行して行くのに、話手にとって“可以”の氣分となることである。そのことを動作の對象(=主題)の側から言へば、對象そのものの性質に話手が上の様な動作を惹きおこさせる原因があることになる。そして“能吃”、“不能戰勝”よりも“可”を用いた方が、主題に對する描寫性が強まり、又説得性が出てくると言ふことも、前述の“合意”の程度のところで見た“可”の性質から説明することができる。しかし單純な客觀的な對象の性質の描寫ではなく、飽くまでも話手の積極的な意圖を示してゐることには變りなく、「主體的描寫」の機能を持つと言はれるのは正しい。<sup>(62)</sup>さらに、獨立性の強い助動詞“可以”<sup>(64)</sup>については、これらのことが一層明確に示される。

4.4 以上で“可”+能動動詞の描寫性を見たが、一步深めて描寫性——「主體的描寫」の程度と仕方について別の一面からとらへてみたい。

1》“大勢所趨”と“可趨(可以進去)”

2》「被動式的描寫句」

まづ1》から、“大勢所趨”の述語“所趨”は指詞“所”<sup>(63)</sup>を接頭することにより形容詞仿語となつて、描寫文の「表語」を構成してゐる。“可”+能動動詞と同じ構造を持つてゐる。

“可趨”はもし“大勢可趨”とすれば、

/我說婦女不都可靠；看我這個樣，看！(X.112=14)

/慢着點兒，二嫂子，這兒可滑。/(L.92=11)

と同じ構造で、前述の如く、“大勢”(主題)について描寫してゐる。主題に“趨”する性質があると、話手の意圖と關係的に限定することによつて、“大勢はこれならすすめる”(—話手にとつての“合意”の氣分は失はれない)、の意味であつて、「主體的描寫」は、話手自身の恣意的な“合意”の氣分に委せられる。

“大勢所趨”<sup>(65)</sup>の場合は、同様に“大勢”(社會の一般情勢=過渡期の總路線)について言へば、話手(個人よりもむしろ中國語の擔手全體)にとつて“所趨”と感じられる。即ち「主體的描寫」をしてゐる。(“趨”はこの場合社會主義社會を目指して進むこと。)しかし、“所”が先行されることにより、“趨”の過程が話手の意志に關係なく遂行されるといふ仕方で、對象(主題)の性質を規制してゐる:非恣意的に過程が遂行されるといふことは、話手にとつて、“大勢”(主題)と“趨”とが客觀的な必然關係に入ることを感じさせる。<sup>(66)</sup>(=“どうしても進んでゆく”)

さらにここで、話手の積極的な意圖を投影させることが、中國語では必要である。“可”が主觀的な(それも“能”、“肯”、“願”に較べてより薄い)肯定、願望を示すに止まるのに反し、“所”は意志を越えた決意<sup>(67)</sup>:“どうしても行かなければならない”となり積極面を出して“さあ進もうじやないか!”の氣分を表はす。

以上指詞“可”と“所”の限定的作用について、その本質的差異を恣意性、非恣意性との間において、それを述語(動詞)との結合關係において求めてきた。この差異は§3.4.に擧げた關係詞的用法としての“可以”と“所以”につ

(22)

いても失われてゐない。後者がより客観的な論理上での因果関係を示す関係詞となり、前者がなお主観的な気分を介在させて（推量の意味もここから来る）、助動詞の作用を保つて来たことは、この點から説明することができよう。

また、「主體的描寫」の程度についてはこれ以上言はなくてもよいが、ただ“可”、“能”、“肯”、“願”が合意（許可） $\leftrightarrow$ 「心願」の系列を持つたのに較べて、“可”、“所”は合意（肯定） $\leftrightarrow$ 決意の系列を示してくれることを記しておく。

つぎに2》「被動式的描寫向」<sup>(68)</sup>について、このことについては多く言はない。主語を主題——subjective（下に置かれてそれに就いて語る對象）「論題」とするならば、主題とそれについての陳述との間に、話手の意識が常に關係的であることが豫想される。主題 $\leftrightarrow$ （話手） $\leftrightarrow$ 陳述といふ關係を持つことである。文の上での論理的分析が発達して、“主語”といふ述語に對して直接的積極的な存在を設定して相 voice が論じられてきたが、それは主語を缺かない言語について可能なことで、比較的古い文法構造を止めてゐる中國語について、すべてを相 voice で割切るとは困難であり、また基本的な文法構造を把握することにはならない。（むしろ動詞の範圍でそれを検討してから後に文について論ぜられることがらである。）

私には王力の「觀念上の被動」<sup>(69)</sup>の考へ方に疑問なため、“可”を相 voice としてみることを放棄する。

尤も、「主體的描寫」の作用をもつた“可”+能動動詞の「表語」である以上、主題が話手でないならば、その側から「表語」との關係をみれば當然に受動の意味を持つことになる。

4.5 “可”が動詞に接頭した強い結合關係を持つ習慣語については、§4.2で見、それを逆に指詞の機能に遡つて考へてきたが、習慣語中には、“可”の記號化の度合が問題であつて、動詞との結合の強弱を見ることも必要である。（これは今後、共時論的に整理してみたいと考へてゐる課題だ。）

“可”が記號化し、接頭語化して；別の一語を形成してみると考へられるものに：

/他自居老虎，可惜没有兒子， / (S. 42=12)

/可笑，居然落了個革命的導師的稱號! / (S. 144=10)

/頂可憐的是那長而無毛的脖子， / (S. 30=4)

の様に王力の「倒裝法」<sup>(70)</sup>をとる獨立性の強いものがこれである。他に、文章體に多く用ひられる“可見（由此可見）”、“可說”などは、“聽說”、“再說”などと同じ用法を持つてゐる。“可知”<sup>(71)</sup>、“可巧”<sup>(72)</sup>も同様、述語（文）に先行する副詞とさへ考へられる。

習慣語の中には名詞に接頭する“可”があるが、その本質である“合意”の氣分を表はす指詞本來の機能を把握すれば容易にそれらの構造を理解することができる。“可人”、“可心”、“可口”、“可火”などがそれで、“合意”の氣分が全面に出されて、逆に實詞（動詞）性を帯びてゐる。“了”、“着”を伴つて動詞的用法を全うするのもある。

/這回例可了他的心了。 /

/講好的是可着院子的暖棚，三面掛檐，三面欄杆，三面玻璃窗户。 / (S.157=12)

“ある點にぴったり合致する”、“丁度適合する”と言ふ意味は§3.5. でみた“可”の限定的作用と深く通じてゐる。

なほ、習慣的用法として次の様な虚詞結構がある。

/小妮子知道這一下又非挨罵不可，甚至怕挨打，... .. / (L. 7=17)

/張大哥要是一盤問我，我非說了不可，我非說了不可! / (X. 233=9)

/入了高中了，哭天喊地非搬到學校去住不可。 / (X. 25=11)

/這個事非我自己辦不可，... .. / (S. 103=10)

“非... .. 不行”、“非... .. 不够”と同じく“必要”の意味である。

また文章體の中には、“可”+能動動詞が“有”、“沒（沒有）”、“無”に導かれる補充關係の仿語<sup>(74)</sup>を作る習慣的用法がある：

/有貨可賣纔能遇到識貨的人。 / (S. 5=8)

(24)

/她只有一條路可走：賤賣。 / (S. 235=2)

/沒有花草可澆灌， / (S. 254=2)

/他是那麼真誠自然，也就無話可說了。 / (S. 44=7)

これらの“可”+能動動詞は、「主體的描寫」の作用をもつ「表語」と考へてよいと思ふ。

4.6 以上をまとめるならば、指詞“可”は、一般的作用として、(話手の主體的な意圖に關係的に)恣意性を帯びて陳述を限定する——話手の意志的な合意(=より少い願望の氣分を表はす可能性——許可)の氣分を表はす。これを陳述(實詞)との結合關係においてみるならば、“可”を伴つて「表語」となり、描寫性(「主體的描寫」の作用)を發揮する。ついで、文の法 mood に關係してみる時、『龍鬚溝』で問題になる三大別中の1)の“可”を檢討する必要がある。

## §5 陳述と“可”

5.1 §3.6. で指詞“可”の“合意”の仕方(限定——提示)の點が最も問題になるのは、1)であると言つた。“合意”の仕方は、1)の場合、それ以下の陳述に如何なる限定的作用を持つてゐるかを見ることである。“可”は、“可以”の關係詞的用法のところ述べた様に、陳述の先頭に立つて先行する文又は主題について、話手の意識に關係的に肯定的な斷定を下して、以下の陳述に何らかの感情を加へる。しかも“可以”がなほ助動詞である以上、關係詞、副詞などを先行させ得る<sup>(75)</sup>が、1)の“可”は、介詞、副詞、關係詞に先行して、常に「表語」、述語、文の先頭に位置する。<sup>(76)</sup>逆に言へば、主題と陳述(文と文)の間に挿入されると言へるであらう。それは陳述(實詞)との結合關係が薄く、無定着なことを意味し、指詞“可”の“合意”の仕方本來の姿が伺はれるのではなからうか。しかし、他方定着化の過程からみれば、なほ一定の位置關係を保つてゐる<sup>(77)</sup>以上、挿入詞の注(9)で擧げた語<sup>(78)</sup>とは異つて、固有の

機能をもつてみると考へられる。

その意味と機能上、類似の内容を持つ“倒”、“反”などに較べるならば、さらに“可”は無定着性<sup>(79)</sup>を示し、陳述(實詞)の結合関係から自由であつて、むしろ反詰文に用ひられる“不”などに近く<sup>(80)</sup>、副詞——挿入詞のどの位置に入るか検討したいと思ふ。副詞としては、最も話手の意識に委ねられて、感情を陳述全體に加へる語であるが、挿入詞的作用からみて、“看!”、“不!”の様に“喚起”、“反詰”(念を押す言ひ方)と言ふ全く話手の氣分にまかせられる語ではない《“可”の説得性の所でみた理由に據ると考へる》。純然たる挿入語ならば、他の陳述に關係なく検討することができるが、“可”は文全體の法 mood と無關係には見て行けない。文の mood にその限定的作用が反映して、特有の感情を加へる所から検討してゆく必要がある。

5.2 先づ“可”の限定的作用について、更に一步深めよう。

/二春，可又得挑水啦! / (L.4=12)

“又得挑水啦”ならば、相手の氣持を無視して、話手の命令の氣分を直接示してゐるが、ここでは、二春の不氣嫌な氣持ち豫想して、これを氣にし乍ら話手の命令、願望の氣分を表はしてゐる：

/姑娘人家，少說話，四嫂不比你知道的多呀? 別淨出叟主意，藥針兒可打不得! / (L.16=12)

ここでも/得打針! /と文句を言つてゐる二春に母親の大媽が、上と同様の禁止を出したせりふである。

他人の氣持を豫想してゐるため、自分の主觀的な命令、禁止は弱まるが、逆に陳述の環境における適應の度合が大きくなり、より客觀的に述べることになる。

問答體(會話)の中で、對手を豫想しながら、自分の意見を主張する場合などに多くこの“可”が用ひられる：

/不錯是不錯，就是有一樣我可看不慣， / (L.66=10)

/這個我可不信，那，瘋子呢，瘋子還不是間着來着! / (L.67=5)



(26)

下の例は、四嫂が／只要肯吃苦，肯幹，人人都能有事兒做!／と言ったのに對し、大媽が反駁してゐるところである。

“可”は話手が以下の陳述を環境から限定して、他を豫想しつつ相對的に提示する作用が一般に言ひうる。相手に遠慮した氣分、又念を入れて相手に押しつける氣分も、ここから説明できる：

／劉巡長，上兩次的錢，可都是您經的手，我問您，可這錢都上哪兒去了? /  
(L. 24=7)

／哟，那可不行，四嫂，可別叫妞子到臭溝沿上去， / (L. 6=6)

上の例は、おまはりに遠まはしに不滿を告げてゐるところだし、下は娘の妞子に命令した四嫂に、隣家の娘子が、氣をまはしながらさへぎるところである。それでも／妞子、快走吧!／と命令するので、今度は妞子に直接向つて：

娘子：／可得留神哪，地下滑，別看掉到溝裏去! / (L. 6=10)

と深く注意してゐる。（“可別～”と“別看～”とを較べよ。）<sup>(82)</sup>

これらの“可”の限定の仕方について言へば、すでに §3.5. の限定的作用を持つ“可”、“可可”で見た様に、“丁度これだけ”、“こいつこそ”と、話手の主體的に意圖する（肯定的斷定↔推量となつて現はれる）氣分を保らながら、指詞の指示する機能をやはり本質としてゐるのであらうと考える。それが上下文（主題——陳述）の關係の中で行はれるのではなく、むしろ環境——陳述の間で行はれるため、文の論理上から把握することはむづかしいが、會話の中にあつてはかへつて、その事が自然であり、“いきたことば”の持つ性格を示してゐることでもある：

／現在作買作賣的，個個可都有干涉你們的本等兒。 / (L. 59=6)

／自來水的鑰匙可在咱身上啦，用水方便! / (L. 98=10)

上の例では、以前と異なる現在の様子を話手の積極的な氣持で、陳述を提示してゐることがわかる。下の例は、文末にくる“了(啦)”を伴つてさらに積極的な話手の氣分が反映される。博良勳の「表示熱烈期待的行爲始獲遂成而欣喜」<sup>(83)</sup>は“可”の提示の作用を (mood) aspect “了”との結合關係から見た

話手の気分であらう。この場合の“可”の発音は「重」、「長」である。

他を豫想して相對的に提示するといふことは、發音の「重、不重」にも比例して、§3.4. で見てきた如く、主觀的な氣分程度を弱め、環境に客觀化させて、陳述の説得性<sup>(84)</sup> <sup>(88)</sup>を増し、警告<sup>(85)</sup>をも表はし得る。

/四嫂，你可別太大意了，這條溝可有毛病，常淹死孩子... .. / (L. 6=12)

/今兒個，我可不能不跟你打開窗戶說說亮話啦。 / (L. 73=17)

/老太太可留神! / (L. 93=17)

また、他を豫想することは、話手の想定された事態についてもさしつかへない：

/要說人民政府可真不錯呀! / (L. 93=1)

/要是我從中賺過一個錢，這上邊可有雲彩，叫我五雷轟頂! / (L. 24=9)

/龍鬚溝要是冲撞了龍王爺呀，可怎麼不發大水! / (L. 97=3)

もう一步進めて、他を豫想することが、環境よりも上下文の中で問題になるに随つて、“可”の限定の作用は、文の論理上で固有の關係を表はす。前に見た“可以”の關係詞的用法もその一つであるが、それが“合意”の程度——可能性の氣分を前面に出してゐるのに對して、陳述全體にかかつて限定——提示の作用を強く表はすものがある：

/您固然算尊是勢派兒啦，我們哥兒們可頭朝下了。 / (L. 59=3)

/二春要眞的能長住了眼睛，我還有個不願意的嗎？可她懂得什麼呀？ / (L. 77=14)

/（威嚴，堅定，而有力）可我要是不要呢？ / (L. 59=15)

博良勳はこれらが。「違異」<sup>(86)</sup>を表はすと言つてゐる。/他不許我去，我可去了。//他直說走，可不走。//秋天了，可還不涼快。/を擧げて、論理的關係を重視してゐる。

反接關係を示す關係詞“可是”は以上の限定的作用<sup>(87)</sup>を最も記號化して固定したものである。

(28)

以上のことも上下文の間の関係から言へば、上の文（主題）を“可”によって分離し排除して、以下の陳述を提示してゐる。限定されるのは、だから上下文どちらについても言ひうる。

5.3 前節までで“可”の機能についての検討は一應終つたと思ふが、§5.1. で言つた文の mood にどの様な影響を意味の上で及ぼすのか、若干の例を擧げて簡単に説明したい。（直敘文については、上に述べた作用を考へれば充分で、ここではそれを除く）。

1》 話手の意志を強める。（決意、否定；反駁；禁止の氣分を強める。）<sup>(89)</sup>  
〔《6》、《11》；《9》、《7》〕

/這兒可拜托您啦! / (L. 92=9) 《6》

/我可得馬虎就馬虎. / (L. 22=3) 《6》

/打吧，我可不怕你啦， / (L. 68=5) 《11》

/我可不缺這份德， (L. 22=2) 《6》

/我們窮，我們髒，我們可不偷， / (L. 33=17) 《6》

/那可不對，你得動軟的，拿感情攏他，我再用面子局他. / (L. 56=10) 《9》

/二春，我可不許你去. / (L. 65=4) 《7》

/您可別忘了，蔣介石還要回來呢! / (L. 59=18) 《7》

また命令の氣分に話手の願望を加へる。〔《4》〕

/真的? 好! 您要走，可帶着我! / (L. 124=1)

/謝謝! 決不對別人說! 您可快着點! / (X. 201=11)

/四嫂，您可別說我有毛病， / (L. 11=13)

2》 話手の詰問の氣分<sup>(90)</sup>を強める。〔《3》〕

/您答應給二嘎子我學徒的事，可您麼樣了? / (L. 21=2)

/是啊，測量是測量過啦，可是測量過這麼些日子去啦，可他們來修了沒有? /  
(L. 81=17)

/您說我可幹點什麼好呢? / (L. 54=7)

/衙門裏可有誰願意幫助你? / (X. 159=1)

/糊窗户, 有預算; 貼標語, 有預算; 買笤帚, 也有; 可誰說過買鮮花呢? /  
(F. 127=9)

3) 無主語文<sup>(91)</sup>に先行して、驚きの氣分を強める。[《2》等。]

/可嚇死我了! / (S. 83=1, 138=9)

/媽, 今兒個可熱鬧啦, / (L. 128=3)

/事情可就鬧糟了. / (X. 130=4)

4) 話手の「惋惜」、「詫異」の氣分を強める。

/喝! 您可倒真開通啊! / (L. 77=11)

/... .. 好丫頭, 你可倒樂瘋啦! (L. 86=2)

話手の環境における氣分を投影することによつて、“可”の限定的作用の結果反轉して逆の意味を持ちうる。いはゆる反詰文で、“可倒好”“可不是(可不)”の機能がそれである。この場合“可”は弱聲化<sup>(92)</sup>され、記號化されてゐる。(反詰文の構造を理解することは興味あることだが、ここではまだはつきりした説明ができないので、これだけに止める。) [《14》、《10》]

また、“可”には“可就(可便)”、“可也”、“可倒”等の結合關係が考へられるが、その結合の強さまた一語と考へるかどうかにについては、今後共時論的に整理する必要を感じる。ただこれらの關係詞、副詞の導く陳述に、插入語的な指詞“可”が全體として限定作用を及ぼすと考へるならば、別の語として“可”だけとり出して考へた方がその機能を見る上で妥當であらう。今の私の考へでは、“可”を無定着性の強い指詞とするため、一語として獨立させて見ていきたい。

## §6 むすび

指詞の機能を中心として検討してきた“可”全體について、以上のことをまとめよう。

(30)

一般的作用として、“可”は〔話手の主體的な意圖に關係的に〕<sup>(93)</sup>、恣意性を伴つて、環境・上下文の關係において、陳述を限定する。話手の氣分の上からは、意志的な肯定的斷定（＝合意）とより小さい願望（＝許可）を表はす。

これを陳述（實詞）との結合關係においてみれば、“可”を伴つて「表語」を構成し、描寫性（「主體的描寫」の作用）を示す。

環境・上下文との論理關係においてみれば、以下の陳述を、他を排除しつつ提示する。

その本質が指詞としての機能：指示——限定——提示にあると考へて、統一した説明を試みてきた。本來無定着な指詞からみて、その機能が最もよく伺はれる用法を持つ“可”は、1》であつた。“なまのことば”に近い『龍鬚溝』に、それらの“可”の多いことは、指詞としての性格をよく表はしてゐる。指詞は、“いきたなまのことば”の中にこそ、その固定化しない無定着な性格のままで、永く生きてきたのである。<sup>(94)</sup> 話手の姿勢を最も強く、常に微妙に反映してゐる理由もここにある。逆に言ふならば、1》の指詞“可”をみることによつて、現在の中國語の作品から、そのことばの“生龍活虎”な程度を伺ひ知る一證とならう。

以上

## 注 補

- (1) 『人民日報』、1951年6月6日號「社論」。引用文はこの中の一節。
  - (2) 王力；『論漢族標準語』、《中國語文》1954年6月、17p.
  - (3) 劇本『龍鬚溝』は、老舎の原作と北京人民藝術劇院の焦菊隱の改編した脚本との二種類がある。その作品の修正されたものも含む一覽表を示す：
    1. 老舎著；龍鬚溝（三幕話劇）、『北京文藝』、第一卷（3期連載）大衆書店1950-
    2. 老舎著；龍鬚溝（北京本）、北京・大衆書店、1951-1<sup>1</sup>。本郷。
    3. 老舎著；龍鬚溝（北京再版本）、北京・大衆書店、1951-4<sup>2</sup>。駒場。
    4. 老舎原著・焦菊隱改編；龍鬚溝（排演本）、『人民戲劇』3卷1期増刊、北京・人民出版社、1951-5.
    5. 老舎原著・焦菊改編；龍鬚溝（演出本）、《北京人民藝術劇院戲劇叢書》、上海・文化生活出版社、1951-6<sup>1</sup>。
    6. 老舎原著・焦菊隱改編；龍鬚溝（演出本）再版、《北京人民藝術劇院戲劇叢書》、上海・文化生活出版社、1952-1<sup>2</sup>。〔第一幕末尾部分与④有異同、第二幕第二場④「巡警」改作「民警」〕
    7. 老舎著；龍鬚溝（修訂本）、上海晨光出版公司、1952-2<sup>1</sup>。
    8. 老舎著；龍鬚溝（修正本）、北京・人民文學出版社、1953-6<sup>1</sup>。
    9. 老舎著；龍鬚溝（ ）、北京・人民文學出版社、1954-1<sup>1</sup>（2次）。
- 2., 7. にはそれぞれ2', 7. の邦語譯がある。
- 2'. 中澤信三譯；龍鬚溝、《てすびす叢書》16、東京・未來社、1953-4<sup>1</sup>。
  7. 黎波譯；戲曲ろん・しゅい・ごう（1952年改訂版）、《現代國民選書》、創元社、1953-6<sup>1</sup>。
4. には、
- L. 佐藤博譯注；龍鬚溝—演出本—、大阪市立大學中國學研究室、1953-1. の油印附註本がある。
1. ~ 9. の他に、最近黎波氏の下に届けられた焦菊隱改編の第5次修正の一九五四年演出本（油印）があるが、これは1955年中に活版化される豫定。

(32)

『龍鬚溝（排演本）』とは、4. を指す。§2.1. の引用文（6）中の『龍鬚溝』は同じく4. である。

(4) 注(3) 4. の作品を指し、(L. 4=13) は注(3) L. のページ・行を示す。  
《註(10)を参照。》

(5) [ ] 内は省略部分。

(6) 何任陌;『「可」字的説服性』、《語文學習》總第16期、1953-1、54p. ～。

(7) 分類表“～是「～述語」”以上を含む。(但し、“特殊”は除く。)

(8) 王力に據れば、この種の“可”は語氣末品(emotional tertiaries)——副詞として見るならば、語氣副詞(emotional adverbs)——の輕説語氣に屬する。  
(王力;『中國語法理論』上册、323p.)

呂叔湘;『中國文法要略』では、語氣詞(a)語中に屬する。(同上書、上卷、27p.;中卷、242p.;中卷、244p.等參照。)但し、“可”についてまとめて論じてゐるのではなく、「表達論」中で有機的に説明を加へてゐる。

(9) 罵語の挿入詞的用法は、よく知られてゐる。例へば：

/他他媽的抗戰八年，坐完車不給錢，可我們蹬三輪的不是吃飽了撐的去蹬車解悶的！/ (L. 28=13)

/怎麼着?! 今兒個我姓馮的，馮狗子，招待朋友拿了你女人兩包烟捲兒，他媽啦的就喊巡警? 喊巡警又怎麼樣?/ (L. 37=4)

/我呀，我還是睡他媽我的覺去。/ (L. 39=14)

/別窮叨唸啦! 買匹馬那麼容易!/ (R. 4=7)

/這媽的天氣真是媽的，媽的再這樣，什麼都要媽的了。/ (魯迅：『答曹聚仁先生信』，《且介亭雜文》中の引用文)

(10) 用例を採集した作品：

L 老舍原著・焦菊隱改編；龍鬚溝（排演本）、『人民戲劇』3卷1期（北京）、1951-5《增刊號》。〔ページ、行は佐藤博附註本；大阪市立大學中國學研究室、1953-1（油印）に據る。〕

L<sup>54</sup> 老舍著；龍鬚溝、人民文學出版社、1954-1<sup>1(2次)</sup>。(1953-6<sup>1(1次)</sup>)

- C 老舍著；春華秋實（三幕劇）、人民文學出版社、1953-8<sup>1</sup>。
- G 老舍著；過新年、『晨光文學叢書』、上海晨光出版公司、1953-5<sup>5</sup>（1951-2<sup>1</sup>）。  
〔『習作』の部分に限る。〕
- F 老舍著；方珍珠、『晨光文學叢書』、上海晨光出版公司、1950-10<sup>1</sup>。
- S 老舍著；駱駝祥子、『晨光文學叢書』、上海晨光出版公司、1950-5<sup>1</sup>。（1939-11  
重慶本<sup>1</sup>）〔會話の部分と文章體の部分に分けた。〕（1953-9 改訂本 7 版には、  
1950-5 晨光本初版の 296bp.11.~ 305p.9l.(131l.) の部分が削除されてゐる。）
- W 老舍著；黑白李、《微神集》、『晨光文學叢書』、上海晨光出版公司、1953-4<sup>7</sup>  
（1947-4<sup>1</sup>）、（1934 發表）〔S. と同じ。〕
- X 老舍著；離婚（修正本）、上海晨光出版公司、1953-12<sup>修正重排 7。</sup>（1947-9<sup>晨光本<sup>1</sup></sup>  
<sup>1</sup>、1933-8<sup>良友本<sup>1</sup></sup>）〔會話の部分に限る。〕
- R 奥台村劇團集體創作樂鳳  
桐・李心斌・李永之・金劍改編；人往高處走（獨幕劇）。、作家出版社、1954-4<sup>1</sup>。

左端のローマ字は、作品の略稱。以下、學例の引用文には注(4)の如く、  
用例のページ、行を示す。

- (11) 張志公；『漢語語法常識』、§28, §41 で述語を繫詞“是”（助詞“的”との結合をも含む。）と表語に分け、繫詞（“是……的”を含む。）を除いた部分を表語とする。

/他是聰明人。//牛是一種哺乳動物。//眼前的一切都是熟習的... .. /（老舍）  
/作戰任務是十分緊急的 -... .. /（劉白羽：『火光在前』）

ここで、表語に先行するといふのは、“是……的”のない場合で、一般に描寫文について言つた。例へば：

/你去看看那東邊的天氣可怎麼樣了?/ (L. 12=10)

/父母運兒可太壞啦, / (L. 21=10)

/喲, 那可真便宜! / (L. 127=13)

- (12) 「分類表」の“動詞”以下を指す。

- (13) 王力；『中國語法理論』上册、140p ~で、能願式 (optative form) を可能式 (potential form) ・意志式 (volitive form) に分けてゐる。「可能式是話



(34)

裏參雜着說話人的意見, 用「能」「可」「必」「該」等字表示。」「意志式是話裏參雜着主事者的意志, 用「要」「欲」「肯」「敢」等字表示。」(同上書, 141p., 142p.) 又、148p. に O. Jespersen の tripartition (三分法) を適用して:

純粹的	{	(A) 必要性 (necessity)	: 須.
		(B) 可能性 (possibility)	: 能, 可.
		(C) 不可能性 (impossibility)	: 不能, 不可.
加意志的	{	(A) 命令 (command)	: 當, 該.
		(B) 允許 (permission)	: 可以.
		(C) 禁止 (prohibition)	: 不可, 不該.

の如く分類してゐる。〔可能式末品について。〕

(14) 王力:『中國現代語法』上册, 132p. に、

/滄浪之水, 清兮可以濯我纓: 滄浪之水, 濁兮可以濯我足. / (孟子 離婁上)

の“可以”を“可以拿來”に譯してゐる。(“澄んでみれば纓を洗はう, 濁れば足を洗はう。”)

(15) “そよそよと吹くはるかぜ、<sup>か</sup>以<sup>くも</sup>くて陰<sup>か</sup>り以<sup>くも</sup>くて雨ふる。”

(16) “一句位のことばで國をさかんにするやうな、そんなことばはありませんか。”

(17) §3.4. 參照。

(18) 阮元編刻:『經籍叢詁』附索引、上海・世界書局、1936-8<sup>1</sup>。

“(性なるもの) したいとおもふ意志がある點で知愚等しいが、しかし志向目標は、知愚各々異なつてゐる。”

(19) 「その時に適當な態度を取り、初めからよしあしをきめてかからぬこと。」

(鹽谷溫:『新字鑑』, 1939<sup>1</sup>, 351p)

(20) 劉淇撰;『助字辨略』(海源閣版), 卷三・上聲「可」:「又廣韻云:『許可也。』愚案:許可之可, 有兩義:如:(孟子)/事親若曾子者可也./此深許之辭.: (論語)/暮月而已可也./此僅可之事。」

(21) 段玉裁撰；『説文解字注』

「可」𠂔也。𠂔者「骨間肉。𠂔𠂔箸」也。凡中其𠂔紫曰「𠂔」。 「可」「𠂔」雙聲。

从「口」「𠂔」。口气舒。

「𠂔」亦聲。肯我切。十七部。

凡「可」之屬皆从「可」。(五・上)

「𠂔」骨間肉，𠂔𠂔箸也。「𠂔𠂔」附箸難解之兒。莊子說庖丁解牛曰「技經肯綮之未嘗。」「肯」崔引此解釋之。「綮」音〈罄〉。司馬云：「猶結處也。」按「𠂔」之言「可」也。故心所願曰「𠂔」，得其竅卻曰「中𠂔。」引伸之義也。

从「肉」从「𠂔」省。「𠂔」者剔肉置其骨也。「𠂔𠂔相箸」，有待於剔。故從「𠂔」。陸德明引説文。字林；皆口乃反。唐韻：苦等切。按「𠂔」「等」二字，古音同在一部。故皆在海韻。音轉入六部，乃在拏等韻也。隸作「肯」。

一曰：骨無肉也。此別一義。(四・下)

(22) (韋昭注)「可，肯也。」(後漢書・皇甫規傳李賢注)「可、猶宜也。」(『經籍纂詁』引)

(23) /即不可道而可非道。/ (荀子・解蔽) の (楊倞注):「可、謂合意也。」(『經籍纂詁』引) で、“道”にはイヤだといひ、「非道」にはその通りだといふ”となる。

(24) 張相；『詩詞曲語辭匯釋』、1954-4<sup>2</sup>., 楊樹達；『詞詮』、1928-10<sup>1</sup> など参照。

なほ裴學海：『古書虛字集釋』、1934-10<sup>1</sup> には、「可」猶「足」也。」の説明は、話手の合意の程度を知るに興味ある用例を挙げてゐる。又“... .. 足以... .. 可以... ..”の構文をもつ例も挙げられてゐる。

(25-1) 成語として、「模稜兩可」などがある。/趙老；先別謝，成不成還在兩可哪!/ (L<sup>54</sup>.36=10) の「還在兩可哪」は“まだどちらともつかない”を言ふ習慣語。

(25-2) /希望 讀者能把什麼地方該用「被」，什麼地方不該用「被」，什麼地方不用可不用，弄弄清楚。/を指す。

(26) 王力；『中國語法理論』、上册，141p. 能願式 (optative form) の中、意

(36)

志式 (volitive form) を可能式 (potential form) よりも本源的と考へ、「主事者の意志」 = 「心願」の面から較べた。

(27) 博良勳；『補助動詞的研究』、1947. (油印), 28p. ~ 32p.

(28) L. の用例の他に次の如き用例も挙げられる。

/小趙來了，說天真可以出來. / (X. 156=10)

/逼急了他可以撒無賴. / (S. 293=4)

/我念了書，明了理，就可以自由戀愛，自由結婚了，是不是?/ (F. 41=10)

/有希望，天真不日就可以出來. / (X. 160=13)

/雖然不够買十成新的車，八成新的總可以辦到了! / (S. 92=8)

/車只是輛車，拉着牠呢，可以掙出嚼穀與車份便算完結了一切； / (S. 267=2)

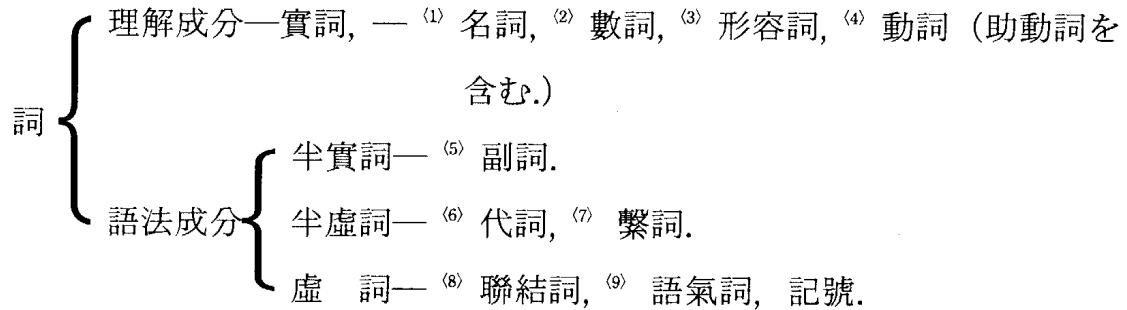
(29) 王力；『中國語法理論』下冊，1p.

(30) 同上書，2p. ~：「代詞的虛性和實性」——從某一種方面說，代詞是一種虛詞，因為它不能常指某一定的人物而言。例如「他」字，時而替代張三，時而替代李四。因此，代詞不像名詞能有定義。在這一點上，「代詞」比「副詞」甚至「語氣詞」還更虛，因為副詞和語氣詞都能有一定的意義。（如「又」表示重複，「嗎」表示疑問），而代詞則因其作用在於替代，以致本身不能有一定的意義。

... .. (中略)... .. 我們在中國現代語法第二節裏，把代詞歸入半虛詞。其所以稱為半虛詞而不稱為半實詞者，我們以為就語法的觀點看來，代詞畢竟是偏於虛的方面。若以中國語源為證，「其」「之」「爾」之類在上古都可用為虛詞（「之」可用為介詞及語氣詞，「其」「爾」可用語氣詞，）若以西洋語源為證，法語的主格人稱代詞只等於拉丁的屈折形式。房氏以「代名詞」歸入語法成分（房氏叫做 Morphimes，見他的語言論，頁 104，參看同書，頁 137.），很有道理。現在我們把一切代詞都認為語法成分，是以中西語源為根據的。」

(31) 王力；『中國語法理論』、上冊，18p.：「「意義」(meaning) 本身就缺乏一種公認的定義。有些語言學家以為只有「理解成分」(sémantème) 是有意義的，「語法成分」(morphème) 是沒有意義的，所以語法成分如代名詞・否定詞・連

詞・介詞之類，不能認為獨立的詞，(房氏語言論，頁103～105.)」と、ヴァンドリエスの分類法を引き、次の詞類を分けた。(『中國現代語法』上册，24p.)



(32) 藤堂明保；『上古漢語に於ける指示詞の機能』、《日本中國學會報》第四、昭和27年，1953-3,1p.

	名詞的	形容詞，副詞的
若	/若勝我，我不若勝/ (莊子・齊物論) ☆若 (おまへ)	<sup>1</sup> /君子哉若人。 / (論語・公冶長) ☆若 ( <sup>1</sup> そのやうな)，( <sup>2</sup> そのやうに) <sup>2</sup> /爾知寧王若勤哉。 / (尚書・大誥)
乃	/乃祖乃父。 / (尚書・盤庚) ☆乃 (おまへ)	/乃無乃稱。 / (莊子・德充符) ☆乃 (そのやうに)
爾	/非爾所知也。 / (孟子・萬章上) ☆爾 (おまへ)	/非天之降才爾殊也。 / (孟子・告子上) ☆爾 (そのやうに)

の如く、若・乃・爾等は名詞、形容詞、副詞のいづれにも用ひられる。

古文では、この代替の機能はより不定的である。

(33) 王力；『中國語法理論』下册，3p.：「它 (= 代詞) 的領土却是實的。(代詞的領土 (domain)，即代詞之所代。「領土」之名採自柏氏語言論，頁247.) 例如「他」字在字典裏雖是虛詞，而當其入句之後，就能替代實實在在的一個人。在這一點上，代詞比普通名詞還更實，因為普通名詞只能替代一種人物，而代詞所代者却是人物的某一個體或若干個體的集合。」

(34) 註 (32) 同書，1p. ~ 2p.

(35) 藤堂論文では (上古漢語に限る)：

(38)

1. リズム成分としての指示詞。
2. 想起詞としての指示詞。
3. 詞間の連結詞としての指示詞。
4. 詞句間連結詞（繫詞を含む）たる指示詞。
5. 別事詞としての指示詞。
6. 應諾詞としての指示詞。
7. 限定詞としての指示詞。
8. 假定詞としての指示詞。

に分けて指示の仕方を説明してゐる。

(36) reminder (O. Jespersen) : 同上書、8p. 参照。

(37) 藤堂論文にも、“命令”、“假定”の気分について説明してゐるが、更に広い範囲で（例へば反詰・疑問などを含めて）みる必要があると思ふが、この検討が指詞に極めて重要であると考えるに拘らず、またそれは非常にむづかしい。

(38) 藤堂明保 ; 『上古漢語に於ける指示詞の機能』、《日本中國學會報》第四、昭和27年、1953-3, 18p. :

「(12) /爾所不勉，其于爾躬有戮!/(尚書・牧誓)（もし勉めねば）春秋期以後、この形は誓詞にだけ用いられるから、古めかしい表現にちがいない。所は指示詞（公羊・文公13年；何休注「所猶是，齊人語。」とある）、所以とは是以に等しいばあいがある。劉淇は『孟子：/所以不願人之膏粱之味也。/（告子上）を故と解する。故とは是以である。』故に誓詞の所は古代の指示詞が假定詞に、轉用された一例とみるべきである」と。

この類の文には、“所……者，……”の構文が多い。

(39) この用例は“所”とともに、楊樹達；『詞詮』から引用した。

古文にはこの他「約」、「卒」、「幾」、「且」、「將」（高名凱；『漢語語法論』、1951-5<sup>2</sup>,496p.）、「許」（呂叔湘；『中國文法要略』中卷、1954-4<sup>6</sup>.14p.）が用例とともにあげられてゐる。

なほ張相;『詩詞曲語辭匯釋』上册、1954-4<sup>2</sup>,78p. に:「可約估數目之辭。」として、

/洛陽女兒對門居，纔可容顏十五餘。 / (王維 洛陽女兒行)

/寒爲旅雁暖還去，秦越離家可十年。 / (黃滔 歸思詩)

/曉來一雨洗塵痕，濃綠陰陰可一園。 / (陸游 曉雨初霽詩)

/涼蟾吐暈圍千丈，老木移陰可一庭。 / (又：夜興詩)

/黃甘磊落圍三寸，赤蟹輪囷可一斤。 / (又：霜夜詩)

/江東可千里，棄妾蓬蒿中。 / (姜夔：虞美人草詩)

/桐舒碧葉慳三寸，柳引金絲可一尋。 / (『花菴中興詞選』，嚴次山：鷓鴣天詞) を舉げてゐる。

(40) 同上書、73p. : 「可，猶恰也。」、「可字疊用之即曰可可，猶云恰恰也。」(『國語辭典』;『學文化字典』、『新華字典』等參照。)

(41) 同上書、80p. : 「可，輕易之辭。引伸之則猶云小事也；容易也；尋常也；在其次也；不在意也。再引伸之，即猶云含糊；隱約也。」

73p. : “恰恰”の例として：

/天假其便，我可可拾着這錦囊兒，劉備!你合敗也! / (元曲 隔江鬪智 劇三)

/我那裏不尋，那裏不覓，你可可在這裏。 / (元曲 竹塢聽琴 劇一)

/可的妹子正在門前，待我去相見咱! / (元曲 灰闌記 劇一) 等。

80p. : “輕易之辭”の例としては：

/雪點江梅纔可可，梅心暗弄纖纖朶。 / (『梅苑』九，無名氏：漁家傲詞)

/驚落梁塵渾可可。一聲囀處，故園春近，桃李還知麼? / (史浩青玉案詞，爲戴昌言歌姬作)

/自春來慘綠愁紅，芳心是事可可。 / (柳永：定風波詞)

/九霄渾可可，萬姓尚忡忡。 / (元稹：春詩) 等。

を舉げてゐる。

(42) (40) の如き用例は別に珍しくない。§5 はこの考へを鍵として進めたものである。

(40)

/你那匹馬眼下可正是出息的時候, / (R. 12=12)

/這陣可正是農忙, / (R. 63=13)

/進工廠可是好事!/ (L. 77=16)

/這可是您說的!/ (L. 76=1)

(43) “まづ一通りはそれでよい”と許可する。

(44) このことは“可”の本質的差異を示すものではなく、“可”が述語（動詞）の内容をどの様に規制するかといふことと、文全體をしての mood にどの様に影響するか（1）の場合）といふ二面から考へたに過ぎない。

(45) 泉井久之助；『言語構造論』、1947-10<sup>1</sup>、VII 語の構成（下）、89p. ～ 107p. 参照。

(46) 同上書、78p.:「元來語彙は個別的精神の分野である。殊に概念の明確をフリンジの拂ひ落しを策する近代の文明言語の語彙にあつてはさうである。張り合ひながらもそれぞれの要素が對立する分野である。複雑にして明確な表現が要求せられる時、特殊な効果を求めるときは別として、それに使用せられる語は共存する他の語の意義的干入を絶えず蒙つてゐるやうではない。常に自由な獨立の記號としてあらゆる文的結合中にその一員として全的に機能する事が出来る必要がある。…… 長い歴史の間に漸次と急激とを交へて次第にこの状態に向つて進んで來たのは事實である。」と。

(47) 30p. 参照。

(48) 1954年10月31日、第5回中國語學研究會全國大會、（金澤大學）で發表された牛島徳次：『可と可以について』から引用。氏に據るとこの種の“可”は：

/A 可 X. /と/B 可 Y/との二構文を立て“主題 A（話者）を提起して、話手の直接的な判断“可”を下しておいて、その後に話手自身の意圖する動作 X を補ふ”と“主題 B（聽者）が、B の意圖する動作 Y を遂行する所へ、話手の判断“可”を下してゐる”とに分けられる。最初の<sup>(1)</sup>例は「(A) 可 X」であり、後二例は「B 可 Y」としてゐる。《1》：“よろしい、(なかなかできる

わい。) こいつ教へてやろう。”《2》：“もどつてもらひたいね”《3》：“おまへはやく行きなさい。”

(49) §3.4. 参照。

(50) 現代語/可以。/の否定詞は/不能。/が用ひられる。この場合の意味：「表示爲情況所允許」（王力；『中國現代語法』上册、132p.）のことについては、《§3.3. 参照》“可”、“能”に相通じてゐることを“合意”の程度の所で述べた。

(51) 張志公；『漢語語法常識』、1953-11<sup>1</sup>、§106,175p.：「“可以”和“可能”能單獨作謂語、性質近於形容詞、這樣用的時候、“可以”可能含有“不錯”“相當好”的意思。... .. 如：

《46》/我是不去要我的介紹信，給別人辦事還可以。 /（趙樹理選集）

《47》/日子過得還可以。 /（馬蜂・西戎：『呂梁英雄傳』）」と。

私は§3.5. の終りで、これらを應諾詞的用法から説明したが、“合意”の程度を見る面からすすめて、助動詞に含めても差しつかへない。描寫性のつよい述語（＝「表語」）——「近於形容詞」——になることは示唆的である。“可”は單獨で述語にならない。

(52) 『華俄辭典』 参照。

(53) 呂叔湘：『中國文法要略』上卷、1954-4<sup>7</sup>,95p.：「一種動作沒有實際出現、只是一種可能實現的事情、那麼也就成爲一種性質。所以動詞前加「可」、「足」等字或在後面加「得」字（白話）、作用和形容詞相同。」また：「「可～」是可能實現的動作所構成的狀態（或性質）、「～了」便是已經實現的動作所構成的狀態。」と。

(54) 香坂順一；『《碗打破了》は被動式表現だらうか？』、中國語學研究會報、1954-11《32號》、1p. では、文の mood の面から見ることと、動詞との結合關係から見ることと、さらに動詞の内的な構造から見ることが一諸くたに論ぜられてゐるが、この様な整理の仕方には不満である。文の構造と、單語の構造とで同一面を取扱ふのは誤つてゐる、と考へるからである。

文の mood に、より強く支配する機能をもつ“可”は、指詞本來の機能を殘



(42)

してみると考へられる三大別の中の1》であつて、説明は後にした。

(55) “可”の定着化の過程を遡つて逆に説明して行くことにした。

(56) 工藤篁;『將無同と不可戰勝』、中國語學研究會報、1954-4、《25號》、8p.

(57) 話手と主題との關係にとらへた時は、その主題を示す。

(58) 能動動詞は上で：「ある客體を目指して進行し、その對象に何らかの影響を與へる動作とか働きとかを表はす」動詞といつてゐる。逆に影響が、話手にかかつてくる場合を「受動動詞」と呼んでゐる。例へば：

/他以爲阿Q 這回可遭了瘟。 / (魯迅;『阿Q正傳』、《吶喊》、1954-1 (人民文學出版社)、97=12)

の「遭」である。

(59) 王力;『中國現代語法』、上册、93p. で、「描寫性<sub>レ</sub>可」と認めてゐる。

(60) 張志公;『漢語語法常識』、1953-11<sup>1</sup>、§45、75p. で：/美帝國主義真可恨。//「每日的糧食」這個電影很好看/について、「可恨」、「好看」也都是修飾關係的<sub>レ</sub>可、被修飾語是動詞「恨」和「看」、但是這些<sub>レ</sub>可事實上都已經結合得很密切、我們平常就拿它們當作詞來用;所以凡屬這類習慣語、都可以作為描寫句的<sub>レ</sub>表語、並且也都可以前面加「是」、後面加「的。」と。

(61) 俞敏;『形態變化和語法環境』、《中國語文》、28號、1954-10、14p. で舉げてゐる形容詞の語性環境の條件を満たしてゐる。

(62) <sup>(1)</sup> /生冷的東西吃<sub>レ</sub>不得。 / <sup>(2)</sup> /~不可<sub>レ</sub>吃。 / <sup>(3)</sup> /~不能<sub>レ</sub>吃。 /を較べると、主題の描寫性では《2》は《3》よりも大きい、《1》より小さい。反面、“たべてはいけない”といふ話手の主觀的な氣分の點では、その程度は逆である。

參考までに、王力の説明をもとめると：「動詞的<sub>レ</sub>前面或後面加上表示意見的<sub>レ</sub>末品時、卻可以變爲帶描寫性的敘述語。」として“可”、“得(不得)”；“難”、“易”、“好”をフランス語と較べてゐる。(『中國語法理論』、上册、100p.)

また呂叔湘;『中國文法要略』中卷、190p. で“好~”を許可の作用から、“可”など同一のところで説明してゐるが、“好看”、“好吃”、“好走”、... ..等と「主體的描寫」の點からも比較できよう。

(63) “所”が指詞としての限定的な作用をもつことは、§3.5. で述べたが、更に具体的に指示——限定の作用を探ってみよう。

- 1) /蔽芾甘棠 勿剪勿敗 召伯所憩 / (毛詩 召南・甘棠)
- 2) /冀之北土，馬之所生 / (左傳 昭公4年)
- 3) /大官大邑，身之所庇也. / (左傳 襄公31年)

で、“所”は具体的に、“蔽芾甘棠”の生じてゐる場所(樹木)——そこが召伯の“憩”するところであり、“冀北”の土地——そこで馬が“生”する、と言ふ様に「そこ」と指示する。(指示することと指示される場所とは、中國語においては同一である。)しかし“所”は指詞である以上、場所のみを指示し、替代としてゐないことは勿論である。3)は人を指示してゐる。文の上から言へば、むしろ以上の事を指示し、以下の陳述を限定——提示する作用をする。(前述の關係詞的用法としての“所”も含む)このことは「被動式」を見れば；一層明確である。

/夫直議者，不爲人所容. / (韓非子・外儲左下)

/衛太子爲江充所敗. / (漢書 霍光傳)

で、江充のやつたこと——こいつが原因で衛太子が“敗”される状態に陥つたことを意味する。(論理的な因果關係の發達と共に、“爲”は“因爲”に、“所”は“所以”となつたのであらう。) /因爲聲色貨利所迷，故此不靈了. / (紅樓夢 25)

《王力；中國現代語法，上册，292p. 》)

/粟者，民之所種. / (漢書 食貨志)

/仲子所居之室，伯夷之所築與？抑亦盜跖之所築與？/ (孟子 滕文公下)

で、“民之所種”が“粟”であり、“伯夷之所擊”が“室”であることを示しうるのは、指詞本來の、話手の主體的な指示——限定から説明することができる。

(爾所弗勗，其于爾躬有戮. / (尚書 牧誓))

/所不歸爾帑者，有如河. / (左傳・文公13年)

で、thought mood 中での“所”の限定的な作用が假定的な条件を表はす假定詞

(44)

となることは、注 (38) を説明する上の鍵とならう。) (これはむしろ 1) “可” と較べられる。)

以上、極く大ざっぱに“所”の指示——限定的作用を見たが、ここで問題にされてゐるのは動詞との関係においてであるから、その方に説明を移さう。

王力：『中國語法理論』上册、266p.：「「所」字的第一特性、是必須附加於動詞之上；如果它所附加的詞本身不是動詞、它也能使它變爲帶動詞性。例如：

/天子所右，寡君亦右之，所左亦左之。 / (左傳・襄公 10 年)

/其所厚者薄，而其所薄者厚。 / (大學)

/誠欲以霸王為志，則戰攻非所先。 / (齊策)

/少喪父母，適人而所天又殞。 / (潘岳：寡婦賦序)

/孤山有陳時柏二株，其一為人所薪。 / (蘇軾：孤山二詠引言)

また、同上書、80p.：「不是動詞也可以做敘述詞」として：「可」の後において、

/子謂公冶長可妻也。 / (論語・公冶長)

/名可名非常名。 / (老子)

を擧げてゐる。

何れも“所”、“可”の後には敘述詞が來ることである。

この様に、結合關係と、意味の上から、何らかの共通點が豫想され、接續する敘述詞（ここでは動詞）をどの様に規制するかを比較することができる。専ら本論では、動詞に對する限定の仕方の差異を問題にした。

(64) 獨立性が強い、とは實詞（特に述語中の場合）との結合關係が弱いことで、單獨で用ひられるか、さうでなければ實詞からより遠く分離される位置（述語中ならばその先頭か後尾）に置かれることを指す。

/把駱駝出了手，他可以一進城就買上一輛車。 / (S. 29=2) (これは、關係詞的用法の“可以”でもある。)

/我的女兒不能給他!//兒子可以不要了?/ (X. 194=11, 12)

/可以能去麼?/ (「能可以去」とはならない。)

/我擦桌子總可以了吧?/ (F. 6=12)

獨立性の強くなることは、話手の氣分がより大きく支配することである。

單獨で、「表語」となり、程度の烈しいことを表はす“可以”がその一例である。「主體的描寫」はここでも一層強くあらはれる。

/修飾打扮是可以的，但是要合身分，要素美；/ (X. 102=14)

/他那個人真可以的。/

又，/雨下得可以的。/，/腦袋痛得可以的。/とも言へる。

助動詞——形容詞——副詞と“可以”を品詞分類する以前に、中國語の虚詞が §3.2. でも言つた様に、常に話手の意識に關係的に（この面から統一性を保つてゐる）、陳述の意味の上に現はれることを把握するならば、その本質に迫ることは可能である。

(65) 賈克著；『大勢所趨』の作品を指す。因みに今年度 1954 年駒場祭に参加するために作られた東大教養學部中國研究會・E クラス共譯の脚本は、この題目は譯してゐない。

(66) ここに因果關係の關係詞“所（所以）”として定着して行つた本質が見られないであらうか。

(67) 若干の例を擧げるならば：

/我們所要介紹的是祥子，不是駱駝，/ (S. 1=1) (在這篇文章裏，我要的是底下這幾點意思：... / (『中國語文』《28 號》，1954-10, 21p. 右=-6) と對比せよ。)

/臺灣... .. 現在却被美帝國主義侵佔・被蔣介石賣國賊盤據作為壓迫臺灣同胞和騷擾祖國大陸，危害亞洲與世界和平的基地，這是我們全國人民所絕對不能容忍的。/ (『北京石景山鋼鐵廠工人寫信給福建前綫部隊的一封信』《人民畫報》1954-10, 36a.)

/無產階級革命黨中的這一特點（=一切腐化，官僚化與墮落現象），是歷代革命黨中所沒有的，而且也不能有的。/ (劉少奇：『論共產黨員的修養』人民出版社，1952-9, 9=9.)

王力はこのことについて、『中國現代語法』上册、292p. で：「若“所”字所附的是一個動詞仿語、須在這仿語的後面加上“的”字、便語氣更暢。(A) /他

(46)

們所偷了來的，都交給我藏着呢。 / (74) ; 若動詞前面有末品修飾，則“所”字必須放在末品的前面。(B) / 况且僭們家的無法無天的人，也是人所共知的。 / (47)」とだけ言つてゐる。

(68) 張志公；『漢語語法常識』、1953-11<sup>1</sup>，§56, 91p. 參照。

(69) 王力；『中國語法理論』上册、184p. ~で、文章論上の範疇 syntactic categories と觀念上の範疇 notional categories の區別を借りて、“可”“足”“難”“易”の後にくる「敘述詞」は「在觀念上也該認爲被動詞」としてゐる。(文章論上は「主動式」と全く同じである。) 又、同上書、176p. で、「換句話說，也許中國古代沒有真正的被動式，就借主動式的結構來表示被動的觀念。但是，到了近代，被動式就顯然產生了：」と言つてゐる。

(70) 王力；『中國語法理論』下册、§39, 231p. ~232p. 參照。

(71) 張相；『詩詞曲語辭匯釋』、1954-4<sup>2</sup>、上册、83p. : 「可知、猶云當然也；難怪也」。“可知道”も含めて、用例を擧げてゐる。

(72) / 天並不十分黑，可巧四下就會沒一個人。 / (X. 223=10) “可巧”の結合はそれほど弱くない。 / 這可真巧! / (R. 14=5) でわかる様に，この“可”はむしろ 1) であらう。

/ 那可巧了，凌大夫，我有。 / (曹禺；『明天的天』《人民文學》1954-9, 10下=9)

(73) 陸志韋；『北京話單音詞詞彙』人民出版社，1951-3<sup>1</sup>，105p. : / 可你的心了。 // 可錢辦吧。 /

『學文化字典』1952-10<sup>1</sup>，23p. : 「恰好，相宜，合適： / 正可數兒；可心；衣服可身兒。 /」

『新華字典』，1953-10<sup>1</sup>，280p. : 「適合： / 可人意。 // 這回倒可了他的心了。 // 這碗茶正可口兒。(冷熱適中) / (引) 將就，就某種範圍不加增減： / 可着錢花。 // 可着腦袋做帽子。 /」

すべて動詞的用法に含まれる。

張相；『詩詞曲語辭匯釋』、1954-4<sup>2</sup>、上册、76p. 參照。この種の用法の起源

は古い。/其所與遊辟也。可人也。/ (禮記・雜記) (正義):「可人也者、謂其人性行是堪可之人也。」と。

(74) 張志公;『漢語語法常識』、1953-11<sup>1</sup>, §131,215p. 參照。王力;『中國語法理論』上册、209p. 參照。

王力:『中國現代語法』上册、218p. で:「這種次品補語都是以動詞爲骨幹的... ..的。(A) /没别的禮送。/ (30) (B) /倒没什麼說。/ (10) 這等於說:「沒有别的禮可送。」「沒有什麼話可說。」;倒轉過來就是:「沒有别的可送的禮物。」「沒有什麼可說的話。」... ..在比較文雅的話裏,就往往用得着「可」字,如「有事可做」,「無書可讀」等。注意:在這種被動意義的次品補語的前面,「有」,「無」卻是可以沒有主語了。」と説明する。

(75) 「分類表」

/她月月有個準進項,收入又多,您手頭不也可以鬆快點了嗎?/ (L. 78=1)

/我擦桌子總可以了吧?/ (L. 6=2)

/你的心病不久,不久,就可以掏出去了!/(F. 28=11)

(76) 但し、場所を示す副詞(張志公:處所詞)、時間を示す副詞(時間詞)は、主題の一部として考へられるから“可”はその後に置かれる:

/瘋子,往後可別再怎麼鬧哄啦,... .. / (L. 44=6)

/我今兒個可得說幾句怎嗎的話... .. / (L. 27=11)

/溝裏可淹死過孩子。/ (L. 8=3)

/四嫂嘴裏可乾淨着點兒,這兒有大姑娘!/(L. 23=6)

また、介詞に導かれる部分が先行する場合も若干あげられるが、これは逆に介詞が動詞性を強くもつてゐると言ふことにはならないだらうか:

/他就是這麼個脾氣,叫人可有什麼法子!/(L. 11=7)

/可教我不是沒想過,你叫我可幹什麼好說?/(L. 44=16) その他

/教四爺可留點神,/(L<sup>54</sup>.11=14) /忙得可總沒得說。/(L. 73=17)

(77) 主題と陳述とを何らかの意味でわけうる文ならば、習慣的用法、成語であつても、その中に挿入することができる自由な性質をもつてゐる。

(48)

/別說了，趙大爺，說的我直打冷戰，新鞋可不踩臭狗屎呀! / (L. 25=5).

/我說娘子，冤家宜解可不宜結呀， / (L. 65=6)

/咱們人窮可志不窮， / (L. 21=15)

また、虚詞結構中にも挿入される。

/嚇，越來可越不像話啦! / (L. 73=10)

(/也倒是，人越多倒越許勾起他的老病兒來。 / (L. 41=6) の“倒”についてもいへる。)

(78) 罵語：/媽的!，/二嘎子他媽，你進來! / (L. 39=16) の類。“可”は單獨で用ひられない。又、主題に後置される例もない。

(79) 王力：『中國現代語法』上册、§23, 368. : 「但是，普通「可」字的語氣總比「倒」字更輕些。像下面這些例子，就只能用「可」，不能用「倒」：

(A) /這可該去了。 / (19)

(B) /我可比不得你們奶奶好性兒。 / (14)

(C) /媽媽每日進來，可都是我不知道的。 / (63)

「可」字又能幫助疑問或反詰的語氣、更不是「倒」字所能替代的了。例如：

(A) /這會子可好些? / (34)

(B) /倘或打出個殘疾來，可叫人怎麼樣呢? / (34)」

で、「更輕些」と言ふのは、陳述（實詞）との関係がより薄く、文全體にかかる感情となつて出てくるためであらう。

/你怎麼反倒老是心裏這麼驚驚扭扭的呢! / (L. 75=15) 《反詰文》

/你怎麼倒不好好的幹了呢? / (L. 80=15) 《疑問文》

で“倒”は“怎麼”に先行しないが，“可”は逆に“怎麼”よりも先に立ち、述語、文のより廣い範圍全體にかかることを示してゐる。

/趙大爺，您這程子老鬪爭惡霸，可怎麼就不鬪鬪那個頂厲害的惡霸呢? / (L. 51=17) 《疑問文》

/龍鬚溝要是冲撞了龍王爺呀，可怎麼不發大水! / (L. 97=3) 《反語文》

接頭の點からいへば、文全體にその限定作用を及すため、「分類表」で示す

様に様様の語と結合する。

(80) 反詰 (念を押した言ひ方)

/這個我可不信，那，瘋子呢，瘋子還不是聞着來着。 / (L. 67=5)

/哈哈，這不活像是個「與世無爭」的隱士口吻? / (矛盾)

/後街趙五叔的大黑驢和王組長的鐵青驢不都比咱大紅馬強? / (R. 6=15)

/那不前些日子給你提的那門子親，你不答應嗎? / (L. 74=8)

/我這麼一佩服您不是，就不免有點顯着擠兌您啦，是不是? / (L. 53=16)

/你這個樣兒叫我老頭子都沒臉見四奶奶啦，她可託我勸你不是一回啦。 / (L. 80=16)

/幾班兒這麼一打不是，人就軟得跟棉花似的啦! / (L. 16=4) (佐藤博注に：  
「不是」は文の初めに「你看。」と言つて相手の注意をひくに似てゐる。)

反詰と言ふ程度に強くなく、“だらう?”と相手に押した氣分を示してゐる。

(81) 王力：『中國語法理論』，上冊、322p. 「所謂輕說，就是把敘述描寫或判斷的力量減輕些，表示不是斬釘截鐵的說法」として、この種の“可”は“倒”、“卻”、“敢”と共に、語氣末品の輕說語氣に含めてゐる。その用例としてこれらは適してゐる。

(82) 話手の主観的な意志を強く出す場合、即ち決意する時は“可”を用ひない：

/話不是那麼說，我當初答應過瘋子，說多嚙政府一動工，我就去修溝，我不能說了話不算! /... ... /不行，我老頭子不能說了不算! / (L. 100=15, 101=1)

《何阡陌；『「可」字的說服性』《語文學習》(總第 16 期)，1953-1, 54p. 參照》

(83) この種の“可”は長く重く發音される。《博良勳：『輔助動詞的研究』，1947, 12p. (1) 參照。》

/我懷疑了十年，今天可明白了。 /

/可配給米了。 /等。

(84) 何阡陌；『「可」字的說服性』《語文學習》(總第 16 期)、1953-1, 54p. 參照：“元來述語の力量を輕減しながら他方說服の力量を増す”。その理由とし



(50)

て：「表示並非「我」的個人意見、而是有根據的、客觀的。個人的意見、也許武斷、不容易叫人相信；大家公認的道理、比較客觀、容易說服別人。我們可以這樣說：減輕了謂語的力量、可增加了說服性。」とあり、例として：

/啲! 二春可又得挑水啦! / (L. 4=12)

/可又要下雨啦! /

を舉げて説明してゐる。

(85) 博良勳；『輔助動詞的研究』, 1947, 14p. (5)

/茶可涼了, 快喝罷。//火可要乏滅了, 快添點兒煤罷。//你若再不聽話, 我可疼你了。//那兒可有蠍子。 /

等の例を舉げて、“可”は「不重」に發音し、述語を「重」く發音した場合に警告の意味がでる、と。

“可”の強聲、弱聲についての意味上の對立は、今後實際に當つて見て行かなければ、結論は出せない。今、博良勳のをもとにして考へてみた。

(86) 同上書；17p. 參照。

(87) 張志公；『漢語語法常識』, 1953-11, §75, 124p. 參照。

/這可是您說的! / (L. 76=1)

について、「這個「可是」還是「是」的意思，還是繫詞。它的作用在強調指出表語所代表的事物，以免含混。」と。意味は“不是我說的，不是別人說語”を含んで、“你自己說的”の點を強調する。即ち、“可”によつて“是... ..的”で包まれた「表語」を強く提示してゐる。

/這半年多了, 我好歹也看出點來了：共產黨可是真不錯! / (L. 62=9)

/溝可是得修哇, 大媽, 修好以後, 就永遠不再出這樣的毛病了! / (L. 98=15)

/咱們政府可不是有錢的! / (L. 116=9)

この提示が、環境、上下文の中で他を排除して以下の陳述を限定——提示する様になる。

/老吳與我也沒關係, 他可是你的親戚, 何必—— / (X. 144=9)

/您雖然是老北平, 可是多年沒回來... .. / (F. 11=11)

/他出來是出來了，可是不能再行醫，... .. / (X. 213=10)

/他不是個壞人——一個黑暗裏的小蟲，可是不咬人。 / (X. 17=13)

これらの用例は本論で言つた「違異」の“可”と同じであると考へられる。

/還出去不出去? 我可要去關街門啦。 / (X. 45=17)

/蹬車賣力氣，白出臭汗，可不能生產，我會勸他。 / (L. 56=6)

また、

/那個吊綑帶的傷員瘦是瘦，精神可好... .. / (楊朔；『三千里江山』)

/睡是睡了，可怎麼也睡不穩。 / (楊朔；『三千里千山』)

の限定の仕方とも共通してゐる。話手の設定（想定）した主題を、「姑且（縱然）肯定這一點」（張志公；同上書。112p.）として、それを“可”によつて排除し、以下の陳述を提示してゐる。上下文の論理上、反接關係の關係詞になることもこの限定——提示の作用が、その本質であると考えられる：

/大家伙兒這份意思我全明白。可是這羣當官的只知道攬錢，不辦正事兒。 / (L. 31=1)

/那個時候，我們不光是没人管，外帶着還有人偷，有人搶，有人訛詐，日子過不了，人活不下去！咱們可都沒忘吧？可是現在呢！人民政府處處照顧咱們，還給咱修溝，不光溝翻了身，人也翻了身。 / (L. 114=6~)

/起急啊，鬱悶啊！... .. 可是你瞧，就連這麼匿起來，都還得找到頭上來，打到臉上來呀！ / (L. 42=8)

(88) 博良勳；『輔助動詞的研究』、1947,16p. 《8》；「加強語勢以增辨白之力。

/我可設拿你的東西呀。//他可向來沒作過那樣的醜事。 /...」；18p 《13》：「加重語勢表示程度深刻。/那個泉水可甜着哪。//那兒的冬天可冷着哪。//這葡萄皮可真薄。 /...」

(89) 同上書、9p. ~ 20p. “可”についての説明を14項に分けてゐる。それに該当すると思はれる項目の番號である。

(90) 同上書、11p., 14p で、/你可去?//這位可是王先生?//你可是此地鄉約?//不知大人今日可升堂?/を擧げて、“可”の疑問詞的用法のことについて説明して

(52)

ある：“これから小説、戯曲の中では生きてゐるが、實際の口語中には見られなくなつた”と。

中國語では：

/那，——我一輩子就老在這兒?... .. 連解手兒，都得上外邊去?... .. /

(L.18=6)

/你臭？你淹死我的孩子？我填平了你個兔崽子！(L.121=8)

の様に、文音調の區別で疑問の氣分は表はし得る。

/這可是你說的？不准說了不算！/ (L<sup>54</sup>. 55=15)

も單純な疑問ではなく、念を押した氣分を出して、詰問の氣分を強めてゐる例を挙げると：/這可是你說的？可別後悔？/ (S. 133=7)；/三元、你可好啊？/ (F. 81=4)、/孟老師、您可好哇？/ (F. 22=2) などがある。（“你好？”と較べて、讓歩した叮嚀な言ひ方になつてゐる。）

(91) 無主語文は、自然現象を表はす文、突然の變化を表はす文、説明文に用ひられる。話手にとって、豫期しない現象が突然起こることから、驚きの氣分を伴つて來るのは當然考へられる。博良勳の《1》：/他可死了。/, /可配給米了。/などはこれに含まれる。

(92) 『華俄辭典』參照。“是（呀）。”の意味を表はす“可不是”は、“可・不對”、“可・不是”の如く否定の氣分を強める“可”とは形態的に區別がある。

前者は：“可” — 「重」・「短」、 “不” — 「輕微」・「短」、 “是” — 「長」・「輕揚」；  
後者は：“可” — 「清晰」・「長」、 “不” — 「重」・「長」、 “是” — 「輕」・「短」。

(博良勳；『輔助動詞的研究』、1947,17p)

(93) このことは、他の“指詞”にも一般に言はれる。

(94) 日本語の譯をつけるならば：

/哟！二春，可又得挑水啦！/ (L. 4=12)：“やッ，二春，こいつアまた水運ばなくっちゃ。”

/這個我可不信，/ (L. 67=5)：“こんなことわしゃ，そりゃ信じねエ，”

/蹬車賣力氣，白出臭汗，可不能生產，/ (L. 56=6)：“ペタルふむのは骨が

“可”について (53)

おれる。むだに汗ばかり出て、それにこいつものを生み出さねエ。”の“こいつ”、“それに”の他、“いつたい”などが間に合ふ程度である。

《1954年12月25日提出》

(54)

## 別記

《2003年8月27日記》

この論考は、はじめの「要旨」にあるとおり、1954(昭和29年)年12月、東大文学部に提出された卒業論文である。引用資料を当たり直したほかは、用字・用語も提出時のままである。

またその「要旨」は、京大大學院の入學願書に附した論文要旨である。この事あって、1959(昭和34)年、夏学期の趙元任「中國文法概説」の、講義レポートを小川環樹先生から要められた。その際、本論文を原稿用紙20枚ほどに縮約し、中國語譯を附して、大學院に提出した。1959年7月、修士2回生の單位に當てた。

事の経緯は、今となっては説明しつくせないが、倉石武四郎先生は、當時の中國語學習者にとって緊要な、「現代漢語」辭典を編まれた。“可 kě” “所 suǒ” の二語について、その關連語彙とともに、以下に掲げておく。

『岩波 中國語辭典』岩波書店、1963.9. (310p. 526p.)

kě 可

[動]<sup>5</sup> さしつかえない。平分可也 = 等分してよろしい。

[名]<sup>5</sup> さしつかえないこと、よいこと。無可無不可 = 可もなく不可もなし。

[副]<sup>4</sup> (動詞のすぐ上に來て) …することができる、…してよい。可來可不可來 = 來てもよし來なくてもよし。豈可馬馬虎虎 = どうしていい加減にすまされようか。二者不可得兼 = 兩者を兼ねることはできない; 双方とも具えるわけにはいかない。

[副] (動詞のすぐ上に來て) …する必要がある、…しなければならない。我沒有再可坦白的啦 = わたしにはもうこれ以上告白すべきことはありません。你有什麼可說的話 = 君はなにか文句があるのか。

[副] (動詞のすぐ上に來て) …に満足をあてる、…するだけのことがある。沒有什麼可吃的 = 格別にご馳走はありません。

q. もし可以吃とえば食料が全然ないことになる。

[副] 單文の主語 (略すこともある) と述語と述語の間に立って、特に述語を強調するとともに、その事態全般にたいする話し手の深い關心を示す。

①感心したり驚いたりしたとき、**你們的家可算模範家庭啊!** = あなたの家は全く模範家庭ですね。**他可是個福相** = 彼はたしかに福相だね。**好處可太多啦!** = よい点はどっさりあるんですよ。**看他想的可多周到啊!** = あの人はほんとうによく気がつきますね。**北京的柿子可大啦** = 北京の柿は大きいね。**這水可涼啦** = この水はつめたいね。**喝! 可真够受的** = やあ、こいつはほんとにやりきれない。**可了不得啦!** = こいつはたまらん。**那可不行!** = そいつはだめだぞ。

②ほかのことや豫想したことと違ってとか、逆にとか言いたいとき。**我可不敢作主** = こいつはおれじゃ定められん。**當天我可回不來** = 日歸りはどうにもできかねます。**我可揍扁了你!** = (お前はうそだと思ってるが) お前をほんとにのしてやるぞ。**他一聽可生氣了** = 彼はそれを聞いたとたんに、とても怒りだした。

③容易に實現しなかったことや久しく期待していたことが實現したときに、意外だと言いたいほどの氣分を示す。**可翻了身啦** = やっと立ちあがった。**你可來了** = 君とうとうやって來たね。**給他解釋了半天, 他可明白了** = 長いこと説明したので彼もとうとうわかってくれた。**可把你的實話給擠兌出來了** = さあ、とうとうお前に泥を吐かせたぞ。

④相當な時間をかてたというほどの氣分を示す。**咱們可有一年多没見面兒了!** = お互いに1年以上も會わなかったね (ほんとに久しぶりだ)。**你可等了四個鐘頭了!** = ヘー、君は彼女をたっぷり4時間も待ったのかね。

⑤心中あれこれと考えてなお分からないことを疑問としてうちだすとき、また相手に念を押す氣持ちで問いかけるとき。**天下可有多少好人哪?** = 世の中に一体どれほどの善人がいるだろうか (世間は鬼ばかりだ)。**你要是當了教員, 可教什麼書哪?** = 君がもし教師になったら一体何が教えられるってんだ。**這可怎麼好喔!** = こいつは一體どうしたらいいんだろうなあ。

(56)

裏頭可有女的麼? = その中にそもそも女性がいるのかね。他的東西可搬進來了? = あの人のものは一體全體運びこんだのだろうか。

⑥相手に言いふくめたり念を押ししたりするとき。你可接着呀 = あんたほれ(茶碗)持つのよ。要是耽誤了、你可負完全責任 = もし(仕事が)遅れたりしたら君が全責任を負うんだよ。要是還要, 你可早賞個信兒 = もしまだ入用であれば早目に知らせてくださいね。你可別忘了 = 君忘れるなよ。去吧, 可小心一點兒 = 行きなさい、しかし用心するのですよ。你可要看明白 = 君、はっきり認識せにやいかんよ。

[接] (複文において) 前に述べたものと違ってとか、逆にとか言いたいとき。下着大雪, 天可不冷 = 大雪が降っているが気温は低くない。似乎是夢, 可又不是夢 = 夢のようだが、しかしまた夢でもない。我是這麼個打算, 可不知道你的看怎麼樣 = わたしはこんな考え方だが君の見當はどうかね。那敢情好, 可也得成啊 = それはいいことだが、實現させなくてはならない; それはいいけど。できるの、そんなこと?

[接] 前に述べたことを受けとめて、“ところで” “ただし” などと話を一轉させるとき。我要雇個人, 可有一節… = わたしは人を雇いたいのだが、ただし一つ条件があって。

[接] (正反對のことを並べて) …かそれとも…というとき。請問你去可不去? = お尋ねしますがいらっしゃるのですかいらっしゃらないのですか。到底來可不來? = 結局來るのか來ないのか。

[副] およその數をいうとき。二分之一可多 = 二分の一よりやや多い。年可三十 = 年は三十ばかり。

suǒ 所

[副] <sup>4</sup> (次に來る動詞とあわせて) …に…される物 (または事)、…が…する物 (または事) ということを抽象的に示そうとするとき。たとえば你所穿的というときは、君に着られているもの、君が着ているものであって、所。

(または所…的) は物または事 (多くはそのすべて) にあたる。你所穿的, 所吃的, 哪兒來的? = 君の着ているもの食べているものはどこから来たのだ (君の衣食のすべてはどこから来たのだ)。

q. 口語に近い言いまわしでは動詞の後に的が來ることが多い。

心中有所盼望 = 心中あてにすることがある。她所不高興的是 = 彼女が喜ばなかったことはこうなんだ。聞所未聞 = まだ聞いていないことをきく。不出我所料 = 自分が豫想した範圍を出ていない。無所不可 = 別に不都合なことはない。

[副]<sup>4</sup> すべてだというほどの意識がなく動詞を次の名詞の修飾語にするとき (後にはかならず的をとמוなう)。所走的路 = 歩いた道。一年所掙的工錢 = 1年にかせいだ賃金。

[副]<sup>4</sup> (爲、被と對應して用いられ) 受身の形を示すとき。被他們所敗 = 彼等に負かされた。

[副]<sup>1</sup> (否定を強めて) まるで…がないというとき。所沒得工夫去瞧您 = まるっきりお伺いする暇が得られなかった。

可愛 [形] [形] 可辦 [形]<sup>2</sup> 可不 [副] 可不 [動]<sup>1</sup> 可不是 [動]<sup>1</sup> 可查 [形]<sup>2</sup> 可恥 [形]<sup>1</sup> 可否 [名]<sup>1</sup> [副] 可怪 [形]<sup>1</sup> 可觀 [形]<sup>2</sup> 可逛 [形] 可貴 [形]<sup>1</sup> 可恨 [形] 可見 [動]<sup>1</sup> [動]<sup>1</sup> 可交 [形] 可敬 [形]<sup>1</sup> 可就是 [接] 可就是 [動]<sup>1</sup> 可看 [形] 可靠 [形] 可口<sub>見</sub> [形] 可哭 [形] 可樂 [形]<sup>1</sup> 可憐 [形] [形]<sup>2</sup> [動] 可憐蟲 [名]<sup>1</sup> 可慮 [形]<sup>2</sup> 可忙 [形] 可能 [形] [名] [副] 可怕 [形] 可奇 [形]<sup>2</sup> 可氣 [形]<sup>2</sup> 可錢 [副]<sup>1</sup> 可巧 [接] 可取 [形]<sup>1</sup> 可身<sub>見</sub> [形] 可是 [動] [接] [動] [接] 可手 [形] 可說 [形] 可說 [動]<sup>1</sup> 可聽 [形] 可惡 [形] 可屋子 [副]<sup>1</sup> 可惜 [形] [動] 可笑 [形] 可心 [動] 可信 [形]<sup>1</sup> 可心思 [動]<sup>2</sup> 可厭 [形]<sup>2</sup> 可疑 [形]<sup>1</sup> 可以 [動] [副] [副] [副] [形] [形] 可院子 [副] 可憎 [形]<sup>2</sup> 可着 [介]<sup>2</sup> 可知 [動]<sup>1</sup> [形]<sup>1</sup> 可菓子 [副]<sup>1</sup> 可作 [形] (56 語)



(58)

所得〔名〕<sup>①</sup> 所好〔名〕<sup>②</sup> 所見〔名〕<sup>②</sup> 所屬〔名〕<sup>②</sup> 所爲〔名〕<sup>①</sup> 所謂〔形〕<sup>②</sup>  
〔動〕〔名〕 所需〔名〕<sup>②</sup> 所以〔接〕<sup>①</sup>〔副〕<sup>①</sup>〔名〕<sup>④</sup> 所以然〔名〕<sup>①</sup> 所有〔形〕<sup>①</sup>  
〔名〕<sup>②</sup> 所在〔名〕<sup>②</sup>〔名〕<sup>④</sup> 所長〔名〕<sup>①</sup> 所作所爲〔名〕 (13 語)

